

第二編 經濟學の根本概念

第一章 緒論

抑も經濟學を説起すに種々の組立法ある可し。雖も、多くは之を説く者の個人的嗜好によりて其趣を異にするに過ぎず、必ずしも一定不動の範疇存する次第にあらず。今小異を捨て、大同に付き各種の異説を大別するときは從來の所説何れも左の三者其一を出でざるものと云ふて可なり。

- 一 經濟行爲の原因たる人間の動機に論を起すもの、(欲望本位論)
- 二 經濟行爲の結果にして人間動機の對象たるものに論を起すもの、(財又は富本位論)
- 三 經濟行爲其物に論を起すもの、(經濟行爲本位論)

前編に於て經濟學は富と人との關係を考究の主題なりとするマーシャルの説を演べ

たり。今其意を更らに詳かにせんに、人間の欲望を其れを充たさんとする人間努力の中、貨幣額に見積られ得可き限りを對象として研究する學問を經濟學と云ふなり。されば經濟學の取扱ふ可き題目は、

一 欲望—努力—富（又は財）

二 富（又は財）—努力—欲望

三 努力—富（又は財）—欲望

の三形式の何れか一に居らざる可からず。第一の形式は先づ欲望の存在を論定し此欲望を充さんが爲めに努力を生じ、努力の結果富の發生を招くに論じ、第二の形式は茲に富あり、之を得んとして人間の努力起り、此富を得て欲望を充足すに論じ、第三の形式は人間の努力ありて富生じ、以て欲望を充足すに論ずるものなり。今此三形式をマルクス流に換言すれば左の如くならん。

(1) B—S—W (2) W—S—B (3) S—W—B

Bは欲望。Sは努力。Wは富（又は財）を表はす。

然るに右三形式の第三は仔細に之れを検すれば、實は第二の形式の一種に過ぎざるを發見す可し。蓋し第二の形式は其實

W—S—W—B

と爲す可きものなり。富(W)ありて努力(S)を生じ、其結果富(W)を生産して、欲望(B)を充足するものなれば、第三の形式は、論を半途より起せる第二の形式と見得可きものなり。今右の三形式に加ふるに交換の現象の形式として、マルクスの説きたる

W—G—W 貨物—貨幣—貨物

G—W—G 貨幣—貨物—貨幣

を以てするときは左の新形式を得可し。

(1) B—S—W²—G—W¹

(2) W¹—S—G—W¹—B

(3) S—W²—G—W¹—B

一は欲望ありて、努力起り、其結果富（財貨物）を生産し、之を賣りて貨幣を得、其貨幣を以

て自己欲望の用に供す可き富（財貨物）を買ふ。二は欲望を充たす可き富ありて之を得んが爲先づ努力し、努力の結果貨幣を得、此貨幣に換へて富を得、此富を以て欲望を充たす。三は努力して富を得、此富を賣りて貨幣を得、之れを以て富を買ひ、欲望を充たすものなり。

今 (W_2) なる財は之を名けて交換財（獨語 *Tauschgut* 英語 *exchangeable goods* 若くは *goods in exchange* 之稱す）と云ひ (W_1) なる財は消費財（獨語 *Verbrauchsgut* 英語 *consumable goods* 又は *goods for consumption* 之稱す）と云ふ。マルクスが説きたる如く、第一位に在る貨幣 (G) と第二位に在る貨幣 (G) との間には、如此品質上の差違あるなく、單に數量上の差違あるのみ。今經濟學の主題とする所は、此三形式の行程の研究にあり。而してマーシャルの如く、及び大多數の英國佛國の學者の如く、經濟學を以て専ら力を經濟行爲の研究に集中す可きものなりとする立場に於ては、此等行程中人間の努力（即ち W ）に屬する部分を中心とするものなり。カーヴァーは其『富の分配』なる書中に其意を明言して云はく

Prof. Marshall has aptly defined economics as the study of man's actions in the ordinary business

of life. Since the ordinary business of life consists in getting a living, it was easy to modify this definition, so as to read, Economics is the study of man's efforts to get a living. Either of these definitions would imply that the science is concerned more with man's economic activities than with the things towards which those activities are directed; more with the ways of getting and using wealth than with the nature and forms of wealth. As a matter of fact, the student of economics cares only incidentally for a description and classification of the things which constitute wealth, but he wishes primarily to know the methods by which wealth is procured and utilized. In other words, economic activities, rather than economic goods, form the subject-matter of the science. — Carver, *Distribution of Wealth*. New York 1904. Introduction.

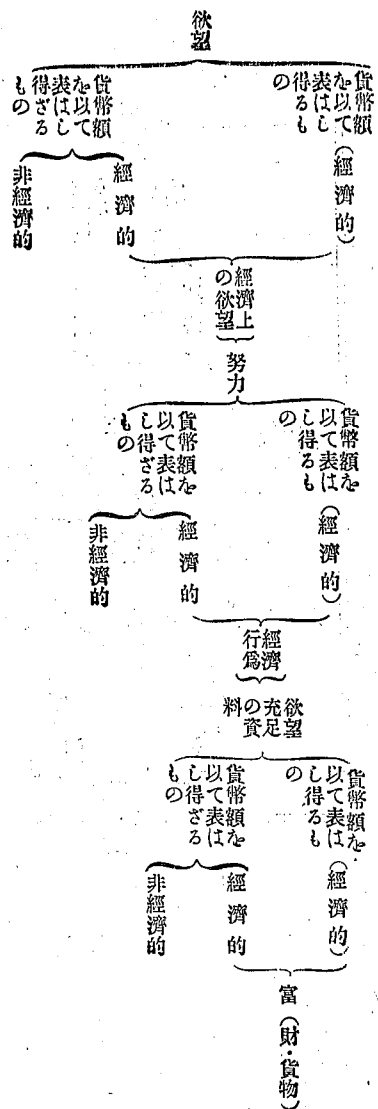
マーシャル教授が、經濟學を以て人生日常生活の業務に於ける人間の行爲を研究する學問なりとの定義を下せるは誠に當を得たり。而して人生日常生活の業務は生活の資を得るを以て第一と爲すものなるが故に、此定義を言換へて、經濟學とは生活の資を得んとする人間の努力を研究するものなりとも言ひ得可し。此兩定義は共に、經濟學を以て人間の經濟行爲を研究の主題とするものにして、經濟行爲の對象たる貨物（富若くは財

を指す)を主題とするものに非ず、富の性質及び形態の研究よりも、寧ろ富を得並に用ゆる方法を研究せんとするものなる意を含むものなり。勿論經濟學者は富を構成する貨物の記述及分類を試みざるにはあらざれど、其は事の序に論及するに過ぎず、其専ら心を注ぐ所は人間が富を得、之れを使用する方法如何にあり。されば經濟學研究の主題は經濟行為に在りて、經濟財にあらずと言ふ可きなり。(富の分配 千九百四年 緒論)

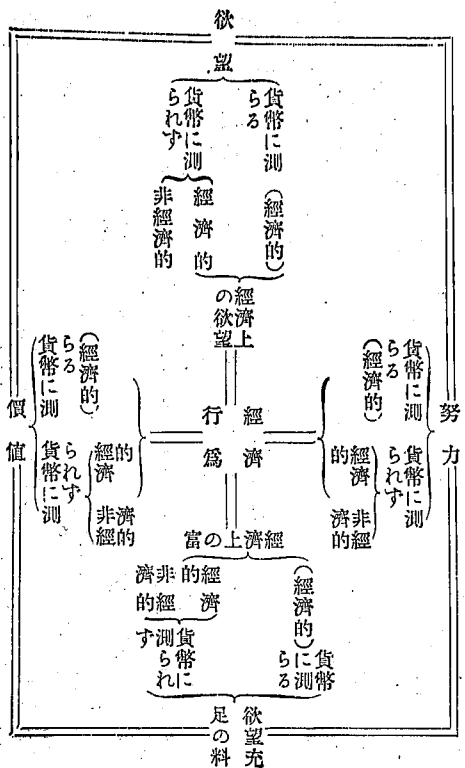
ハーヴァーの此言は眞に克くマーシアルの眞意を道破したるものにして、同時に英米學者現在の立脚地を明かにして遺憾なきものなり。其立場は即ち前述三個の研究法の中其三の經濟行為本位論に屬するものなり。

左に圖解を以て右説明を補ふ可し。

甲 圖



乙 圖



イーミヤハは本書の結構を説いて

We have seen that economics is, on the one side, a science of wealth; and, on the other, that part of the social science of man's action in society, that deals with his efforts to satisfy his wants, in so far as the efforts and wants are capable of being measured in terms of wealth, or its general representative, i. e. money. We shall be occupied during the greater part of this volume with these wants and efforts, and the causes by which the prices that measure the wants are brought into equilibrium with those that measure the efforts. For this purpose we shall have to study,

(1) Bk. III. Wealth in relation to the diversity of man's wants which it has to satisfy,

(2) Bk. IV. Wealth in relation to the diversity of man's efforts by which it is produced.

吾人は既に經濟學は一方に於て富の學問たるものにして、他方に於ては人間の社會に於ける行為の學問たり、人間が欲望を充たせんが爲にする努力の中、富又は其一般代表物たる貨幣の稱呼に於て測られ得る限りの論究するものなるを論ぜり。吾人は本書の大部分に於て専ら此等の欲望を努力とを論究す可く、並に欲望を測る物價が努力を測る物價と均衡を得る原因に就て研究す可し。今此目的を達する爲めに、吾人は

- (一) 第三編に於ては富と富に依りて充たす可き人間欲望の種々相との關係を論ず可く
(二) 第四編に於ては富と富を生ずる人間努力の種々相との關係を論ず可し。
と云へり。今此意を表にて示せば左の如し。

欲望を充す

需要論(第三編)

富
努力に依つて生産せらる — 供給論(第四編)

即ち共に第二の形式により經濟行爲の結果にして欲望の對象たるもの即ち富に論を起す富本位論にして而して其中心は經濟行爲其物にあるが故に第二形式の一種たる第三形式の經濟行爲本位論とも認む可し。而して第三編は第一形式の態を取りて、

B—S—W

の行程を究め、第四編に至りて

W—S—B, W, B—W—B

の行程を尋ねんとするものなり。而して第三第四兩編の準備として、此第二編根本概念の論は、先づ欲望の對象にして努力の結果(欲望を充し、努力によりて生産せらる)たる富

其物の性質を定めんとす。されば一見する所、カーヴァーが經濟學は富の研究に非ず、富を得んとする努力の研究なりと云ふに反對の立論法を取るが如く見ゆ可し。然れども是れマーシアルの眞意にあらざることは、既に第一編に於て縷述したり。然らば何故マーシアルは其眞意を反對に解せらる可き説明法を用ひたりやと云ふに、一は氏が思想の明瞭を缺くに依るこゝ疑なし。此點より云へば氏の立論の結構は決して巧なりと云ふ能はず。然れども其理由は更に深きものあり。他なし、第三の形式が到底獨立の地位を占む可き價值なく、單に第二形式の一種に過ぎざるが爲めのみ。蓋し經濟行爲本位論は到底富本位論の範疇を脱する能はざるこゝ前提の形式に顯はるゝ所の如し。されば經濟行爲中心論を執るマーシアルも詳細の説明を下さんとするに方りては、圖らず力を富本位論に藉らざるを得ざるに至れるなり。予が從來經濟學立論の趣は千差萬別なりしども、畢竟は第一第二兩形式の外に出でざりきと斷言するは茲に基くなり。

B—S—W, W—S—B

の二形式以外何の形式ある可からざるこゝ交換の形式の

の二者を措て他にあらざるに均しん可し。

マールシャルは第二編の結構を叙して云ふ。

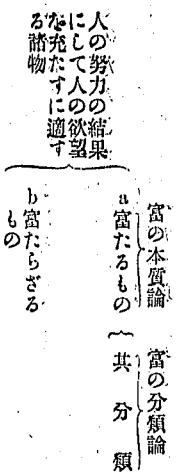
We have to inquire which of all the things that are the result of man's efforts, and are capable of satisfying man's wants, are to be counted as wealth (1), and into what groups or classes they are to be divided. (2)

右邦譯

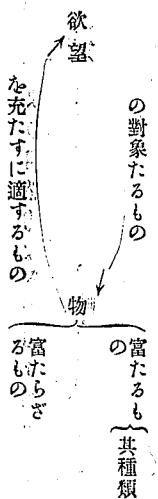
吾人の研究す可きは次の如し

- 一 人間努力の結果にして人間の欲望を充たすに適する凡ての物の中、富と認む可きものは何なりや。(即ち富の本質論)
 - 二 而して此富は如何なる部類又は階級に分別せらる可きや。(即ち富の分類論)
- 是れを表示すれば、

甲 表



乙 表



マールシャルは此くの如く先づ其論を富より起すに付て多少不安の念ありしものを見え其理由を辯明して云ふ。

For there is a compact group of terms connected with *Wealth* itself, and with *Capital*, the study of each of which throws light on the others.....while the study of the whole together is a direct continuation, and in some respects a completion, of that inquiry as to the scope and methods of economics on which we have just been engaged.

吾人が此くする理由は富其物並に資本と關連する一括の術語の部類ありされば富及資本を先づ論するは此等諸概念を明かならしむる效あり……而して此種の研究は第一

編に於て斯學の範圍及研究法を論じたる部分の續論を見る可く、又之れに結論を與ふるものと見る可きが爲なり

而して論を欲望に起さる理由として

And, therefore, instead of taking what may seem the more natural course of starting with an analysis of wants, and of wealth in direct relation to them, it seems on the whole best to deal with this group of terms at once.

故に一見寧ろ自然的立論法なるが如き、欲望並に之れと直ちに關連して富より説明を始むるよりは、此種概念（富及資本並に之れに關連する諸概念）に關する論を初めに置く方大體に於て勝れり云ふ可し

と云へり。即ち氏も欲望本位論の立論法の方より、自然的なるが如き感を人に與ふるものなることを思はざるに非ざるを知る。氏の立場稍々透徹を缺くの狀以て見る可きなり。予自身の立場に關しては補論に述べたり就て見よ。

故に氏は直ちに右順序を多少變更することある可しとて、曰く

吾人は本編に於ても欲望及び努力の種類に就て、多少前提する所なかる可からず……然れども一見明瞭にして常識を以て知り得可き範圍に止め、其以上何等の推定をも要求せざる可し

と其常職と云ひ、一見明瞭と云ふもの、果して眞に然りや否や、既に多少なりとも前提を設くる以上は何故進んで學術的に欲望と努力とを説くを爲さるや。全然富を發足點として論を立つる、亦一見識たるを失はず、然るにマ氏は富を發足點とす、明言し乍ら、猶右顧左眄欲望及努力に就ても多少の前提を要す等、打消的態度を執るは、予輩の感服し難き所なり。以下氏の論述常に此筆法を免れず、學者をして適從に苦ましむるものあり。

氏の爲めに惜みても猶餘あり。

氏は更らに辯明の辭を重ねらく

The real difficulty of our task lies in another direction; being the result of the need under which economics, alone among sciences, lies of making shift with a few terms in common use to express a great number of subtle distinctions.

吾人の事業の眞の困難は此に在らずして他にあり即ち他の凡ての科學と異り經濟學のみは日常生活に用ひらるゝ僅少の用語を以て精緻なる區別を言表はす可き必要を有するが爲なり。

ミ。然らば猶更以て始より精確嚴密の用語例を開く可きにあらずや。且つ亦た日常生活の用語を學術語として用ひるが爲め經濟學は人の誤解を受くてふ苦情はマ氏以前多くの經濟學者の繰返へしたる所なれども吾人を以て之れを見るに如此苦訴は一向其理由なきものなり。日常生活の學問たる經濟學が日常の用語を其儘襲踏するは理の當然にして若し架空に新造語を使用するときは經濟學は其存在の理由の一部を失ふの外なからんのみ。

マ氏は此點に於ては經濟學は教を生物學に仰ぐ可きものなりとシドルウケンが各生物の生活の習慣並に自然界に於ける其一般の地位を定む可き構造の部分は其由來に關し最多の光明を與ふるものにあらず却て最少の光明を與ふるものなりと云ひ各生物が其包圍に順應するに最も適せる性質は多くは比較的近時に發展したるものなりと云へ

るは亦た經濟現象にも適用するを得可き至言にして現時に於て其職分に應じて最も肝要なる地位を占むる經濟制度は多くは最近の發生に係るものにして雇主と労働者との關係仲間商人と生産者との關係銀行と其貸主及び借主との關係の如き皆然り。利子の如き労働者間の分業の如き地代の意義の如き亦皆然らざるはなしと云ひ而して又同時に吾人は其用語の沿革を研究するを忘る可からず假令目前の用の爲めに經濟學を研究するにしても成る可く用語を過去の慣用と背馳せざらしめ之に依つて吾人の祖先が爲したる經驗を教訓とするを得るを勉めざる可からずと云ふ。其他氏のミルを引照しバデオットを擧ぐる別段紹介の用を見ず多くは氏が彼に偏せず是れに黨せず英國流の客觀主義も可なり獨逸流の主觀主義も不可なし行爲論も執る可し動機論も捨つ可からず専ら現在生活を對象とするも亦歴史的的研究法も加味す可してふ折衷主義の立場を反覆するものを見て大過なし。行論の行程に別段の加ふる所あるを見ざるなり。吾人の切に氏より聞かんミ欲するは如此常識談にあらず嚴正なる科學的立場より見たる經濟學研究の順序如何に關する氏の見解是れなり。然るに本章に於て氏の論ずる所は到底吾

人の望に副ふものにあらず。されば以下第二章以降に於て氏が富其他の根本概念を論ずる條に就て、更らに仔細に氏の所懷を窺ふの外なし。

第一章 補論

經濟學の立場は何を以て始む可きやは、古來學者間に種々の論あり。其重なるものを擧ぐれば、

- 一 ラウ其他舊派の學者は多くは財の概念より始む、ロツシアも原論第四版迄は財より始め、第五版以後は人間其物より始む可しと改め
- 二 ワグナーは人類の經濟的本性より始め
- 三 シュフレは人間其物より始め
- 四 リンドヴルム及シュモラーは經濟の概念より始め

五 デーツェル及半ば舊派の學者は多く經濟行爲の概念より始め

六 フックスは經濟と經濟行爲を併立して始む

るが如き是れなり。之に對して予は嘗て欲望より始む可きを主張せり。曰く

『此等の説明の方法は所謂循環法になつて其何れから始めても、つまり最後に何か説明を要せないで分つたとしてある前提が一つ残つて仕舞ふ。例へば財を以て出立點として經濟行爲とは財を得るとである、經濟とは如此經濟行爲の總稱である云ふときは、然らば財とは何であるかとの間に答へなければ充分の解答でない。然るに財とは人間の欲望を充たすものであると答へる。さうするに欲望とは何であるかとの反問が起らざるを得ない、又人類の經濟的本性を以て出立點としても其通である。經濟的本性に驅られてする行爲が經濟行爲であると説明した丈で經濟的本性なるものゝ何であるか、分らない間は悉く半成の説明に止るのである。然るに經濟的本性とは何であるか、詰めて見れば、人類の欲望を充たさんとする衝動と同意義になつて仕舞ふ。其他人間其者經濟其者を以て出立點とするときは、分らないものを以て分らないものに答へること』

となる。即ち一の未知數の値は他の未知數である云ふことになる。殊に人間其物云ふは極めて幼稚な説明の仕方、經濟學は人間に關する學問たるは元より言ふ迄もないことを忘れたものである。經濟學は人間の總ての方面を研究するのでなく、唯其經濟生活に發現して居る處を研究するのである。換言すれば、經濟學は人間の經濟的方面を研究するのである。されば此經濟的方面とは如何なる方面を云ふやと問ふことを要する。處が經濟的方面は即ち經濟行爲なり、經濟なりとして、此等を以て説明の出立點とするときは、人間百般の行爲中特に經濟行爲なるものと其然らざるものとを、何に依て判別するかの間が出て来る。經濟行爲とは人類の經濟を營む行爲なりと答へれば、然らば經濟とは何ぞやとの間が出て来て、つまり段々堂々巡りをして元の處へ戻つて来るの外は無くなる。然るに此經濟とは何ぞやとの間に答へるには、經濟の依て起り、經濟行爲なるもの、依て發動し来る淵源がなければならぬ。そこで之れを名けて人類の欲望と云つて居る。即ち其何れから説明を始めるにしても經濟の概念の出立點であり、到達點たる可きものは唯一つ、此欲望である。經濟行爲と云ふ概念は之から出立して歸納的に逆進して始めて解答し得るのである。(國民經濟原論第一卷本集後段に收録す)

故瀧本美夫教授は克く予輩の眞意を諒解せられて『福田君は津村君や河上君や予なきは經濟學の基礎觀念を論ずる其説明の仕方が違つて居るのであつて吾々は欲望の次に財を説き其次に經濟行爲を説くのであるが、福田君は欲望の次に經濟行爲を説き其次に財を説く』云々云へり一橋會雜誌四十號百十七頁此れ實に予が立論法の用意なり。即ち予が執る所の形式は第一の $B \rightarrow S \rightarrow W$ にして、瀧本津村河上諸君の執る形式は $B \rightarrow W \rightarrow S$ 即ち第三の形式たる $S \rightarrow W \rightarrow B$ を前後したるものにして、經濟行爲本位論を逆に欲望本位論としたる一形式なり。予の見る所にては此形式は第三形式に勝らず、却て其缺點を共通に有するものなり。欲望ありとも直ちに財を生ぜず、先づ其道行として努力(經濟行爲)を喚起して後財を生じ若くは贏得するなり、努力なくして直ちに財生ずるの理は予に於て解すること能はず。予は三氏之説を異にするは遺憾とすれども、遽かに舊説を改む可き理由を見ざるものなり。

近來ワグナリは其『理論的社會經濟學』なる新著に於て此の問題を論じ、經濟學出立點に關する論争は要するに

一 個人を以て始むるもの、社會を以て始むるもの

二 欲望を以て始むるもの、財を以て始むるもの、人間を以て始むるもの

の二點に歸着す可し云へり。右書二 十二頁而して氏自らは個人を以て始る者に與し、個人の

經濟的本性なるものに論を起す可しこの舊説を維持せり。昨年出版の『精確科學としての經濟學』なる書に於てヴォルフは欲求 Begehrung を以て説明を始む可しとして、曰く、

Motiv (nicht Kraftquelle) wie aller bewussten Menschentätigkeit so auch der Wirtschaft sind "Begehungen" des Menschen, seine Bedürfnisse, Ansprüche und Wünsche. S. 4.

凡ての意識的人間行動並に經濟の動機 (力源に非ず) は人間の欲求即ち其欲望要望及願望是れなり。右書第四頁

而して欲求を分て

一 動物的植物的欲求

二 官能的欲求

三 想像及理性的欲求 (アレントノ教授も亦無限の欲望は想像の欲望あるのみとす)

の三とにして立論せり。此論稍々予が意を得たり。

* * * * *

以上は本書舊版に於て記し置きたる所を若干字句を修正したるものなり。然るに、此の欲望本位論は、端くも其後數年にして獨逸より歸朝せられたる左右田博士によつて、いさも痛激に駁撃せられたり。其論載せて博士の『經濟哲學の諸問題』にあり。而して予自らも欲望本位論の舊説は、よし博士の言はるゝが如き謬説たらずとも、亦た決して妥當の見解ならざるを知り、既に『國民經濟講話』に於ては博士の説を待つまでもなく、稍々異りたる説明を用ひたり。詳しくは讀者の同書に往き見られんことを切望せざるを得ず。但し其の書の説明を以てするも、左右田博士の贊同を見出すことは不可能なる可し。何となれば博士の非難せらるゝは、單に欲望を以て、本位とすること其事にのみ止るにはあらず、アブリオリに立せざる立論一切を斥けらるゝものなればなり。此點に於て予は如何に考ふるも、未だ博士の説に服従すること能はず。殊に博士は經濟學てふ特殊科學其ものに就て、何が其のアブリオリたる可きやを判然と説示せられざるが故に、予

等は適從する所を見出すを得ず。單にアブリオリを以て出立す可しと云ふに於ては、經濟學を他の科學と分別す可き標準は與へられず。博士の論は經濟學にも、法律學にも、政治學にも、將た亦た社會諸科學の一切に共通の點のみを説かれたるものにして、其特に『經濟哲學』と標榜せらる可きものは終に發見し能はざるなり。博士は貨幣の概念を以て、經濟學にての文化價值とするも可ならんとの一の假定説を提出せらる。此くの如きは本書に於て予が既に力説したる所なること、讀者自ら之を知らん。マーシアルも亦貨幣秤量の標準とふことには、大に力を用ひて説明し居れり。左右田博士説は古き商品に新しき商標を貼付したるに類せざるか疑なき能はず。概念と其形式に全力を傾倒すること、予の斷じて服し難き所なり。

本章參考書は右國民經濟原論に掲げたるもの、外總ての經濟原論の首部を見る可し。ワグナーの書の原名は、

Wagner, Theoretische Sozialökonomik, Leipzig 1907.

ヴォルフのは

Wolf, Nationalökonomie als exakte Wissenschaft, Leipzig 1908.

新刊書にては

Schumpeter, Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, Jena 1909.

あり併せ見る可し。

第二章 富

英米の學者が Wealth と云ひ、佛國の學者が Richesses と云ひ、伊國の學者が ricchezza (或ひは patrimonio) 但し此語は寧ろ獨語の Vermögen 即ち財産に該當す) と云ふは、皆之を邦語に譯して富とす可し。獨逸語にて富を言表はす語は Reichthum なれども其用法は英佛伊語に於けるものと異り、富有なる狀態の意に用ゆること多く、從て英米佛伊の學者が富なる語を用

ゆる處には概ね *Get* 即ち財なる語を用ゆ。英米佛伊の學者も稀には財なる意の語 (*goods* 佛 *biens* 伊 *beni*) を用ゆることなきにあらざれども多くは富なる語を採る。されば富なる語と財なる語とは全く同義なりやと云ふに然らず。而して兩語の異同も亦必ずしも一定せず。近來英米の學者も獨逸流に倣ひて財なる語を用ゆること稍々多く殊にマーシアルは屢々此語を用ゆ。普通の解釋に従へば多くは富なる概念は總括的にして財なる概念は特定語なりとし、一は廣く、一は狭き意義を有すに倣すもの、如し。殊に獨逸語の富は一の狀態(富有なる狀態)を表はすものにして其内容は甚だ廣汎なるに財なる語は特に指名し得可きもの、殊に實體的存在を意味するもの、如し。然るにマ氏が説は其反對に出で財なる語は汎く富なる語は狭く解釋す可きものと爲せり。即ち前章に於て單に欲望の對象にして努力の結果たる物と言ひしものを以て財と爲し其中富たるものと然らざるものとありと論ず。曰く

In the absence of any short term in common use to represent all desirable things, or things that satisfy human wants, we may use the term *Goods* for that purpose.

汎く願望の目的たるもの若くは人間の欲望を充たす物を言顯はす可き常用語なきに依り吾人は財なる語を此義に充て用ゆ可し

と。而して氏は謂へらく富とは直接又は間接に欲望を充たす物より成り従て富は汎く願望の目的たるもの又は人慾を充たすものより成るものなれども願望の目的たるものの全部が富たるにあらず。友人の愛情の如きは人生の幸福に肝要なる要素なりと雖も之を目して富と云ふ能はず。されば先づ汎く願望の目的物たる財の概念を正し次で財の中富たる可きもの、何なりやを究めざる可からずと。

氏は先づ財に有形財と人的財又は無形財との二種あるを云ふ。有形財とは有形物は勿論此有形物を保持使用し又は收益し并に將來に於て有形物を得る總ての權利を言ふ者にして自然の物質的賜物即ち土地河海空氣氣候農業鑛業漁業製造業の產物建物機械器具抵當權其他債權公私會社の株式獨占專賣權版權及び地役權其他の習慣に基く權利等を含み旅行の機會好風景を楽しむの便博物館に入るの便宜等も亦嚴密に云へば此中に入る可きものとせり。此の列舉は極めて雜駁にして一定の系統なきは、マ氏の常套に

して如何ともし難し。此點獨逸學者の精確に如かざる所なり。其は姑く恕するも氏が有形財の内容を斯く定めたる標準は、抑も何處より取り來りしや一向説明なし。有形物と有形物に對する權利とを全然同一種に計上すると予輩の到底服従し能はざる所なり。抑も權利が財又は富と見做さる可きや否やは經濟學者間に異論ある所にして、予輩は權利は財と稱す可きものに非ずとの説を執るものなり（詳細は補論に論ぜり）。假りに一步を譲りて權利を以て財に算入す可きものなりとするも其は無形財の一種たる可きものにして到底有形物と同一種に屬せしむ可きものにあらずとは多くの學者の認むる所なり。然るをマースアル獨り之を有形財に入る、からには必ず相應の理由ありての上の事なる可きに其理由を示さざるは聊か不充分の憾なき能はず。況んや最後に旅行の機會好風景博物館を樂み得るの便宜等まで加ふるに至ては、不透徹の論と言はざるを得ず。此等は有形物其もの（汽車汽船風景好き土地博物館の建物に）直ちに關連するものにあらず之に關連して人々との間の約束即ち社會的設備あるによりて起る一種の有價事件たるに過ぎず。有形物と同一視す可き證據は如何に附會の辯を弄するも之を見出すことを得ざるなり。

無形物に關するマ氏の所論も亦同一筆法に出づるものにして、非難の餘地を存する可きと尠しとせず。氏曰く非有形物財は二種に分つ可し。

一 行動及享樂に向つての人間の性質及才能

商業的技能職業上の熟練、讀書又は音樂より樂を享け得可き才能等は是れなり。

此種のもものは皆人間自身に具はるものにして従て之を名けて内界の財と云ふ二は一に對して外界の財と稱するものにして、人々との關係より成り人の用を達するものなり。

傭役及び體僕其他の隷屬者より要求す可き人的勤務の如き此種に屬するも是等は過去にのみ存し現時に於ては存在せず。今日に於ては得意の關係、商業上の取引關係等此種の適例なり。

此一節の脚註にマ氏はヘルマンの左の一句を引照せり

For, in the words in which Hermann begins his masterly analysis of wealth, "Some goods are in-

ternal, others external, to the individual. An internal good is that which he finds in himself given to him by nature, or which he educates in himself by his own free action, such as muscular strength, health, mental attainments. Everything that the outer world offers for the satisfaction of his wants is an external good to him."

ヘルマンは富に關する名論を始むるに左の言を以てせり。曰く財に内界の財あり、外界の財あり、内界の財とは、人が天然より與へられて已れに有するか又は自己の自由行動によりて修養したるものにして、體力・健康・智力の如きものを云ひ、外界の財とは人の欲望を充たす可く外界が人に與ふる凡ての物を云ふ。

此引照は氏の説を確むるの効なし。外界が人に其欲望を充たす可く與ふるものは、マ氏の所謂外界の財のみならず、否其大部分は寧ろ第一種の有形財より成るものなり。マ氏は同頁の脚註第二に於ては外界の財なるものを分て二とし、有形財及無形財の第一種（即ち茲に外界の財と稱するもの）を包含せるものと爲せり。此説は當を得たり。マ氏は果して何れの説を本とするや茫漠の謗を免れず。思ふに氏の意は、外界の財は無形財の第

二種と、有形財の凡てより或るものなりと爲すにあらん。然るに以上説く所は其反對に出づ。讀者注意を要す。

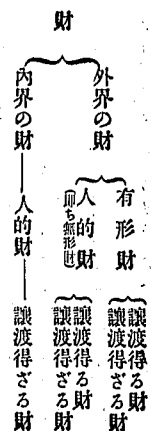
氏は次に又財を分つて譲渡得可き財と譲渡得ざる財の二とす。而して譲渡し得ざる財は

- 一 人の才能性質即ち内界の財
- 二 個人的信任に基く營業關係即ち賣渡し得可き得意關係の一部として他人に譲渡すことを得ざるもの

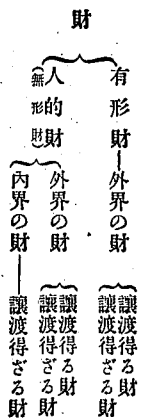
- 三 氣候光線空氣等の與ふる便益並に市民の特權公財産を使用する機會及權利等を含むものと爲す。譲渡し得ざるもの豈に獨り此等のみならんや。氏自らも亦次の表に於ては有形財にも譲渡し得ざるものあるを明示せり。氏が列擧法甚だ不精密なりと云ふ可し。

氏は以上の分類を示す可き一表を脚註中に掲げたり。左は即ち此なり。

甲 表

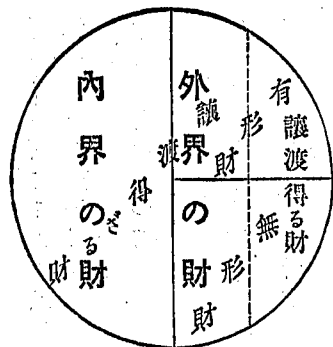


乙 表



今試みに右表を圖解すれば左の如し。

甲 圖 (甲表に當る)



乙 圖 (乙表に當る)



マシーナルは次に自由財なるものを論ぜり。曰く人の占有せず、又人の努力を要することなく天然より興へらるゝものを自由財と云ふ。土地は元來自由財なり然れども現今に於ては個人の立場より見ては土地は最早自由なる天然の賜と云ふ可からず。ブラジルの原始林に於ける樹木は今日と雖も、自由財なり、河海の魚は一般に自由財なり、然れども漁場區域を獨占し、殊に外國人の漁業を禁ずるが如き處にありては然らず。人工に依りて作られたる牡蠣養殖地は如何なる意味に於ても自由財と云ふ可からず、自然に繁殖する牡蠣床は其占有せられざる限りは、自由財なり。其占有せらるゝ場合に於ても國民全體より見れば猶自由財と云ふ可し、唯國家が其權力を以て其専用を、或個人にのみ許すときは個人の立場より見れば自由財にあらず。然れども自由の賜たる土地に耕種せられたる小麥、自由なる河海より漁獲せる魚は自由財にあらず、何となれば其耕種、其漁獲には人間の勞働を費やしたるものなればなり。

今右の意を表示すれば、

甲 表

物	占有せらるゝもの	非自由財
占有せられざるもの	自由財	

乙 表

物	勞働を費したるもの	非自由財
勞働を費さざるもの	自由財	

經濟學普通の定論によれば、非自由財は之を經濟財 (Wirtschaftliche Güter 英 economic goods) と云ふ。即ち財は之れを自由財と經濟財の二種に大別す可しと爲すものなり。マースアルは此條下に於て別に經濟財なる語を用ゐざるが故に、自由財ならざるものを以て直ちに皆經濟財なりと爲すものなるや否や明瞭ならず。然れども前後に照應して氏の意を測るに氏は自由財なるもの必ずしも皆經濟財なりと認むるにあらずるが如し。經濟財は必ず占有せらる可きものなることは、言ふ迄もなき處なり。然れども個人の占有し能はざる又は占有せざるもの皆自由財なりと云ふ可からず。總ての公共物の如き經濟財にあらず、而も亦た自由財にあらず。個人は或は之を享樂し之より利益と便宜とを受くるの權を有す可し、之を占有すること能はず。之を以て天然の自由なる賜と同一視す可きにあらざるや勿論なり。又マ氏が茲に使用する勞働なる語は經濟上の勞働のみを指すか、汎く一般に人の身心の活動を指すか明ならず。若し單に經濟上の勞働の意義に使用したりとせば、(而して經濟書に於て勞働なる語を用ゐるときは、先づ經濟上の勞働の意に於てす可きは當然なり) 氏の所説は誤謬たるを免れず。非自由財は必ずしも經濟上の勞働によりて得らるゝものに限らず、又必ずしも經濟的に占有せられず、予の嘗て引例したる如く、非常の辛苦を嘗めて植物學者が高山に登り得來れる草花は、非自由財には相違なければ、(其存在するときは自由財なり、之を得來るに多大の勞を費やしたるに依りて非自由財と成る) 決して經濟財にあらず。反之植物商が市場に鬻ぐ爲め採集し來れる草花は、經濟的に占有せられ、經濟的勞働を費やしたる非自由財にして、而して經濟財なり。若又氏にして勞働なる語を汎く一般に身心の勞働の意に解す可せば、(氏の文意を察するに其眞意は然るもの、如し) 一般的意味に於ける勞働を費やしたるものを以て非自由財とするは當を得たりと雖も、此非自由財は直ちに經濟財を以て目す可きものにあらず。今此理を表示せんに左の如くなる可し。

一視す可きにあらざるや勿論なり。又マ氏が茲に使用する勞働なる語は經濟上の勞働のみを指すか、汎く一般に人の身心の活動を指すか明ならず。若し單に經濟上の勞働の意義に使用したりとせば、(而して經濟書に於て勞働なる語を用ゐるときは、先づ經濟上の勞働の意に於てす可きは當然なり) 氏の所説は誤謬たるを免れず。非自由財は必ずしも經濟上の勞働によりて得らるゝものに限らず、又必ずしも經濟的に占有せられず、予の嘗て引例したる如く、非常の辛苦を嘗めて植物學者が高山に登り得來れる草花は、非自由財には相違なければ、(其存在するときは自由財なり、之を得來るに多大の勞を費やしたるに依りて非自由財と成る) 決して經濟財にあらず。反之植物商が市場に鬻ぐ爲め採集し來れる草花は、經濟的に占有せられ、經濟的勞働を費やしたる非自由財にして、而して經濟財なり。若又氏にして勞働なる語を汎く一般に身心の勞働の意に解す可せば、(氏の文意を察するに其眞意は然るもの、如し) 一般的意味に於ける勞働を費やしたるものを以て非自由財とするは當を得たりと雖も、此非自由財は直ちに經濟財を以て目す可きものにあらず。今此理を表示せんに左の如くなる可し。

甲 表

財	占有せらる	勞働を費す	非自由財	經濟財（經濟上の勞働を費す）
	占有せられず	勞働を費す	非自由財	非經濟財（經濟以外の勞働を費す）
		勞働を費さず	自由財	

乙 表

財	勞働を費す	非自由財	占有せらる	經濟財（經濟的に占有せらる）
	勞働を費さず	自由財	占有せられず	非經濟財（經濟的に占有せられず）

之に對してマシアルの前段の所説を表示すれば左の如し

財	自由財	占有せられず	勞働を費さず	經濟財（？）
	非自由財	占有せらる	勞働を費す	

然るにマ氏は非自由財を以て直ちに經濟財と爲さざるこゝ次に説く所を見て察可し（猶自由財經濟財の區別に就ては補論に論究しあり）。

マシアルは次に個人の富（A person's wealth）なるものを論ず。曰く、人の有する財の中其人の富と認む可きものは何なりや、此間に對しては學者の答ふる所歸一せず、雖も彼是酌量して大體次の如く答ふるを以て當を得たりと信ず。

單に個人の富のみ言ひて、別に註釋を附せざる時は、左の二種の財より成るものなり。一所有權の目的物にして從て讓渡並に交換し得可きもの

土地家屋家具機械其他凡ての所有物並に株式債券抵當權其他他人をして貨幣又は物品を交付せしむるを得る各種の債權

他人に對する負債は右の反對に消極的の富とす可し。從て個人の富を計上するときは其内より控除するを要す。

勤勞其他入るゝ共に直ちに消滅する貨物は、個人の富の一部たらざるは勿論なり。個人の信任又は關係に基く商事會社に於ける持分は第二種の外界的個人財に屬す

可きものにして此種に屬せず。

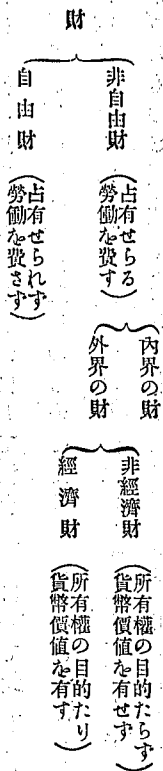
二個人に屬し彼をして有形財を得るを得せしむ可き外界の無形財。即ち個人的性質才能等は假令生活の資を得るの用を爲すに雖も此種に屬せず此等は内界財なればなり。又直接に經濟的價值を有せざる個人的友誼も亦此中に入らず。之に反し營業及職業的關係營業の組織又昔時にありては奴隸の所有權傭役徵收權の如き亦た此種に屬す。

右の如く富なる語を解釋するは日常生活の慣用と合するものなり。而して又第一編に述べたる經濟學の範圍中に屬するもの、みを包含するの便あり。即ち之れを稱して經濟財と云ふて可なり。故に經濟財は凡て外界の財より成り左の二種を含むと云ふを得可し。

一個人に專屬し他人の有たらざるもの。

二貨幣を以て測り得るもの。貨幣は一方に於て此等財を生ずるに要したる努力及犧牲を測り他方に於ては之れを以て充足する欲望を測る。

○是れマ氏の説く所なり。之に依て觀れば氏は非自由財の總てを以て經濟財なりと爲すものにあらず。即ち



右の所説の如くんば予は全然氏に同意するものなり。即ち占有せられ又は勞働(廣き意味にて)を費したるもの直に經濟財たるにあらず。其占有が金錢的意義を有し其勞働が貨幣價值を有するときに於てのみ之が對象たり之が產物たる財は經濟財なるなり。而して經濟的とは畢竟するに貨幣價值を有するもの、謂に外ならずされば所有權の目的物たり勞働の成果たる財と云ふに代へて經濟的に占有せられ經濟的勞働の成果たるものと予が謂ひたるに其意全く相均し。

然るにマ氏は右の如く正解を下し乍ら直ちに之を打破す可き論辯を續けたり。曰く

或目的に向つては時として富なる語を更らに汎き意味に用ゆること必要なり。但し其場合には混同を防ぐ爲め特に附言を要す。其廣き意味は、大工の熟練が直接には他人の欲望を充たすの手段たるのみにして、自己の用に供せられず、唯間接にのみ（之を用ひて賃銀を得）自己の欲望を充たすと、彼が使用する大工道具に均しきが如き場合に、之を富の中に包含せしむるが如きを云ふ。即ち嘗てアダム・スミスが論じて以來多くの學者が襲踏する『人的富』なる語を用ゐて、經濟上の用に供せらるゝ心身の力才能習慣並に前項第二種の無形財を言表はして差支へなかる可し。加之經濟上に用ある才能は亦た間接には貨幣を以て測り得るものにして汎き意味に於て、此を富と做す敢て不可ならざるなり。されば從來學者が此種のことを富と見做す可きや否やを、重要な原則的問題なるが如く論争したるは、吾人の興みし能はざる所にして、畢竟するに一の便宜問題たるに過ぎざるものと云ふ可きなり。唯注意す可きは、此種のことを包含して富と云ふことは特に明言を要すること是れなり。單に富と云ふことは職業的才能は之を含まざるものとせざれば混同を免れず。故に此意を表はさんが爲めには特に附言して『有形及無

形（人的）の富』と云ふ語を用ゆれば敢て差支へある可からざるなり。

次にマ氏は亦『共同的富』なるものを論ず。即ち私有權の目的物にあらずして經濟上に於ける人生活動に有用なるもの例へば國民たるより得る種々の便宜身體財産の安固道路瓦斯教育等の便宜又汎く云へば人生に適する氣候風土の如きを『共同的富』と云ふ。斯く氏は極めて範圍廣く解釋し、殊に一國民と他國民とを比較するに於て、一方が凡て此等の便宜を有するときは又た之を以てより富たる國民と見做す可きものなりと云ふ。即ち自由なる天然の賜と雖も國民全體として之を見れば其國民のみに與へられたる專有物として之を他國民に對して富と爲す可しと云ふなり。茲に於て氏は更らに論歩を進めて個人の立場より見たる富、社會の立場より見たる富を論ぜり。即ち個人の立場より見て富ならざるも社會の立場より見れば富たるものとして、公共道路運河建物公園瓦斯水道等を引例し又テームス河の如きも英國全體として見れば慥かに富と云ふ可きものなりと云ひ其他學術上の知識發明音樂文學終には國家の組織迄を挙げ之に對しては外國に對する公債私債は消極的富として控除す可きものなりと云へり。

而して社會的(又は國民的)富の個人的富と異なるが如く茲に『世界的の富』なるものありて國民的富と相對す。國內に於ける各人間の貸借は國民的富を計算するに方りては全然計上せざるが如く、世界的富を計算するには國際間の貸借も亦計入せず、河川が國民の立場より見て富たる如く、大洋は世界の立場より見ては富なり。要するに世界的富とは國民的富の概念を擴張したるものに過ぎずと云ふ。

凡そ此等の論究は予を以て見れば所謂概念の遊戲たるに過ぎず實際に於て學術的講究の價值少きものなり。されば茲に論評の必要を見ず唯マ氏所説の梗概を紹介し置くのみ。

此章最終の問題として、マ氏の論ずるは價値の概念なり。此は第四版迄は第一編總論の處に在りて、予も本書上卷の第一版に譯出したれども後思ふ處ありて之を取消し、第二版に至ては全く其項を削除し置きたり。然るにマ氏は第五版に於ては本章の末尾に之を轉じたり。今其大意を紹介せんに氏はアダムスミスが價値なる語に二の意義あり一は物の利用を意味し、一は購買力を意味す云ひしは其當を得ず、價値なる語はスミス

の所謂第二の意味にのみ專用す可きものなりと云ひ、左の如き定義を下せり。

The value, that is the exchange value, of one thing in terms of another at any place and time, is the amount of that second thing which can be got there and then in exchange for the first. Thus the term is relative, and expresses the relation between two things at a particular place and time. 價値即ち一定の時と所に於て、他物の稱呼にて言表はされたる或物の交換價値とは、之に對して其時其所に於て、交換せらるゝ對手物の一定量を云ふ。即ち價値なる語は相對的にして、一定の時と所に於ける二物間の關係を言表はすものなり。

而して今日現在の文明國に於ては、金又は銀を貨幣として流通するが故に其關係は常に貨幣の稱呼を以て言表さる。即ち物の價値は常に一定の貨幣額を以て稱せらる。斯く貨幣に言表はさるゝ價値を名けて價格(物價) Price と云ふと論ぜり。

マ氏の此定義は近來學者間に多く行はるゝ所と甚だ異れり。殊に獨逸の學者の價値なる語を解するは、全く異なる意義を以てせり。今其理由を詳述するは本章の範圍外なりと雖も、其の最も根本的理由を考ふるに獨逸系統の價値なる語、即ち獨 Wert 蘭 Waarde

英 Word 中、拉丁系統の價值なる語即ち英 Value 佛 Valeur 伊 Valore 等は抑も語源に於て同じからず、一は主として主觀的概念より成り、一は専ら客觀的物能を意味す。予は嘗て前者は邦語の「ねうち」に當り、後者は「あたへ」に當るを論じたることあり。其意前者は人が或物を見て、我が欲望を充すの度合を測るを示し、後者はマ氏の言ふ如く、物ミ物ミの比較關係を云ひ表はす。アダムスミスが第一の用法ミ云ひしは前者に該當し、第二の用法ミ云ひしもの後者に該當す。而て實際上價值の語を用ふるも、亦此二様の意義を附するもの、如し。マ氏がスミスを以て當を得ずミ云ひしもの反つて當を得ず。スミスこそ能く眞意を盡したるものと云はざる可からず。而して何故マ氏が此謬に陷れるかミ尋ねるに英國正統學派は常に經濟現象の客觀的方面に重きを置き、物の働きの關係を見るに專なるが爲め、大體に於て正統派の流を汲むマ氏も、亦價值を解するに全然客觀的眼孔を以てしたるが爲なり。之に反して獨逸の學者殊に奧國の學者は經濟現象を見るに全く主觀的眼孔を以てするが故に、價值を目して全然主觀的概念なりミ爲すなり。

予を以て之を見るに、兩者共に其の好む所に偏するものにして、價值に主觀的方面あり、

又客觀的方面あり。必ずしも其一に專なる可からざるものなり。唯概念ミして云ふときは價值は先づ主觀的概念なり、其客觀的方面は主觀的概念より傳來せる第二次的現象なり。さればアダムスミスの説を改竄す可しミならば、寧ろ第一の意義を存して第二の意義をこそ捨つ可けれ、マ氏の如く第一を捨て、第二をのみ採ること、其意を得ず。マ氏は以下價值定義論を試むることなし。依て茲に一言予が自己の立場を明かにし置くものなり。

第二章 補論

獨逸の學者は英米の學者が富なる語を用ゆる場合に財産なる語を用ゆることあり。伊國の學者も亦本文に述べたるが如く獨逸學者に倣ひ財産なる語を用ゆるものあり。今獨逸學者の説中最も代表的なるものを舉ぐれば、ノイマンの如き是れなり。曰く

Das Vermögen Jemandes ist der Inbegriff der Güter, über die derselbe in seinem Interesse verfügen kann. — Neumann, Grundlagen der Volkswirtschaftslehre. Tübingen 1889. S. 106.

或人の財産とは彼が自己の利益の爲めに處分し得る財の總稱なり

自己の利益の爲めに處分し得る云ふは、本文に於て經濟的に占有す云ひ、マ氏が所有權内にあるもの云ふと語異なりて意は即ち同じ。

ノイマンは財を定義して云ふ、

Güter sind Dinge, die den Interessen, Bedürfnissen, Wünschen, Absichten, Neigungen, u. s. w. Jemandes zu entsprechen geeignet erscheinen.

財とは或人の利益・欲望・願望・見込嗜好に應ずるに適すを認めらるゝ物を云ふ
又は

Güter sind Dinge, die dem Interesse, Jemandes zu entsprechen geeignet erscheinen.

財とは或人の利益に應ずるに適すを認めらるゝ物を云ふ

即ち右兩定義を合して財産の定義を下せば、

財産とは或人が自己の利益に應ずるに適すを認むるものにして、彼が自己の利益の爲めに處分し得る物の全體を云ふ

となる可し。されば、ノイマンは、マ氏と反對に、富を以て總括的概念と爲し、財を以て其構成要分を爲すものにして、是れ總て大多數の學者（殊に獨逸國の學者）の執る所の見解なり。唯其單に利益に應ずるに適し利益の爲に處分し得るてふ一箇條のみを以て財並に富の特徴を爲すは、餘りに簡に失して盡さざるの嫌なきにあらず。氏は斯く簡單に定義するに就て種々の論辯を費す。雖も、予は遽かに服従す可き所以を見ず。氏の構思明晰にして其説明亦透徹せりと雖も、聊か好む所に偏するの傾あるは否定す可からず。故に予は本文に於て稍冗長に渉る説明を敢てしたり。唯其富を以て總括的にし、財を以て構成分なりとするは予の全然同意する所なり（マ氏の a person's wealth を云ふは財産に該當す）。

伊國の學者にして新進學者中最も俊秀の聞へ高きスピノーは財を定義して曰く、

Le cose utili (da uti servire), che, cioè, hanno la capacità di soddisfare ad un bisogno, si dicono

beni. — Supino, Principi di economia politica. Napoli 1905, p. 33.

利用ある物（利用に供せらるゝ物）即ち一の欲望を充たす可き資格を供ふる物を財
とす。

氏はまた財の財たるには、左の要件を具ふるを要すと説く、

- 1) L'esistenza di un bisogno.
 - 2) Che la cosa abbia proprietà, tali da estinguerlo.
 - 3) La conoscenza di queste proprietà.
 - 4) L'accessibilità della cosa.
- (一) 之れに對して欲望の存すること。
 (二) 此欲望を除却するの性能を有すること。
 (三) 此性能を人が認識すること。
 (四) 此財を以て欲望充足に供す可き便宜の與へられること。

其一二は從來凡ての學者（殊に伊國學者）の説く所に異ならざれども、三三四を附加したるは、氏の卓見と云ふ可し（以下引用するカール・メンガーの説太だ相似たり、或は不

ビーノはメンガーを承くるものなるやも計り難し、メンガーは既に一八七一年に、以下引用する説を公けにし居ればなり。即ち三はノイマンの『應ずるに適すと認めらるゝ』なる文句に該當し、四は『利益の爲めに處分し得るもの』と云ふに該當す。單に欲望の存在し、之を充たす性能を具備したる丈けにては、未だ財の財たる所以を盡したりと云ふ可からず。人が此性能を認識し、且其認識を實現し得る社會的の約束ありて、財は始めて財たるものなり。予嘗て此意を説て左の如く云へり。

『人類が斯く外界の力に須つて其欲望を充たすと云ふ以上は、其欲望を充たす可き所のものを外界から得來らなければならぬ、此くの如き外界のものであつて、人類が一定の欲望を充たすに適すと思惟するところの特定物を稱して、『財』と云ふ。……其自身が人類の欲望を充たすに足る性質を具へて居る丈けでは未だ以て人類經濟行爲の目的物とはならない。其特定財が眞に欲望を充たすに足る性能を有して居ることを人間が認めるに依つて始めて經濟行爲の目的物となるのである』（國民經濟學原論本書後段に收録す）。

予は猶右の註釋中に數多の引照を掲げたり、右書二百二十五頁以下を見る可し。

之を要するにノイマン以下の獨逸學者（以下引用するメンガー亦然り）、竝にスピーノ等は皆財の財たるには主觀的要素與りて大に力あるを認むるものにして予の全然同意する所なり。然るにマ氏は本文中嘗て此邊に論及せず是れ本文に云へる如く氏が客觀的方面に専らなる英國正統派を繼承するが爲なり。但アダム・スミスはGoodsとStockとを分ち用ゆること獨逸學者に同じ。次に有形財と人的財即ち無形財を分つは間然す可き所を見ず雖も權利を以て有形財中に算入するは予の到底同じ難き所なり。抑も權利は財なりや否やの問題は學者間に異論ありて、ノイマンは前掲書七十二頁より九十頁に涉りて之を詳論す。蓋し此問題に關して最も價值ある研究として斯界に重ぜらるゝ所なり。

然れども予は氏の説に服する能はず氏は權利を以て財なりとす。曰く、

Vernemen muss diese Frage, wer—wie die meisten—bewusst oder unbewusst lediglich dem allgemeinen Sprachgebrauch folgt. Denn nach letzterem pflegen wir wohl von Rechten an Gütern zu sprechen, nicht aber Rechte selbst als Güter zu bezeichnen. Und verneinen mag jene Frage auch wer annimmt, dass nur was "als Zweck" nicht was "als Mittel" nützlich ist, ein Gut zu nennen sei.

S. 72.

權利を財とす可きや否やの間は、有意識的又は無意識的に日常の用語例のみに従ふものは之を否定せざるを得ざる可し。蓋し日常の用語法にては『財に對する權利』なることを言ふも、權利其物を以て直ちに財なりと爲さなければなり。又財とは客體たるもののみを云ひ、手段たるものを云はずと主張するものも、亦此間を否定するなる可し。

予は常に學術語も可成日常の用語法に準據す可きものなりと信ずるものにして、又財は客體たるもののみを指し手段たるものを含まずとするこゝノ氏の言ふが如くなる故に、其結果として此間を否定して、權利は財に非ずと主張するものなり。ノ氏は實物を所有せず、之れを他人に與へて、自己は之れに對する所有權のみを有するものを以て、實物のみを所有するものより、富まずと云ふは、矛盾ならずやと云へども、『富有なる状態』は、必ずしも財を多く有するの謂のみにあらず、されば、此は一向差支なきものと信ず。次に述ぶるが如く、氏は勤勞は財ならずと云ふ、然らば物を所有せず勤勞のみを享有するものは、物のみを所有するものより、富まずと云ふか。氏にして勤勞も財なりと云ふならば、此

論は兎に角始終一貫するが故に、又一見解として支持するを得可きも、勤勞は財ならず云ふ以上は、財を有するのみを以て富たり云ふ能はず、氏が論旨は一貫を缺くものにあらず。

ボエム・バヴェルクは、氏に反し權利は財ならず主張す。其の論は *Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der wirtschaftlichen Güterlehre*. 1881. 『經濟財論の立場より見たる權利及關係』今は氏の論文集一九二四年刊自一至二六頁に收むに詳述しあり。

メンガーは、其原論の第二版に於て（第一版になし）主觀的權利は財とす可きものにあらずを論じて左の如く云へり。

Die Frage, ob subjektive Rechte als Güter zu betrachten seien, ist zu verneinen. Ein Ding wird nicht erst dadurch zum Gute, dass es zum Objekte eines Rechtes wird. Damit ein Ding zum Gute werde, darf es nicht ausserhalb der menschlichen Verfügungsgewalt stehen; dass es sich in der Verfügungsgewalt einer bestimmten Person befindet, ist indes schon mit Rücksicht auf die sogenannten freien Güter wie auch in Rücksicht auf die isolierte Wirtschaft keine Voraussetzung der Güterqualität

eines Dinges. Nicht die subjektiven Rechte auf die Güter, sondern die Güter selbst stehen in dem die Güterqualität begründenden Verhältnisse. Söwhl die Meinung, dass nur den subjektiven Rechten auf Güter, als auch die Meinung, dass diesen Rechten, zugleich aber auch den Objekten derselben die Güterqualität zukomme, ist unhaltbar. Die Frage, ob ein subjektives Recht auf ein Gut selbst ein Gut sei, ist etwa jener zu vergleichen: welcher Kulturart die Grenzlinien der einzelnen landwirtschaftlichen Besitze angehören, ob diese Grenzen Aecker, Wiesen, Wälder, Weingärten etc seien? Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. A. SS. 13-14.

主觀的權利を財と認む可きや否やの問は、之れを否定す可し。一物は一の權利の客體となるによりて始めて財となるものにあらず。一物が財となるには、人間の處分權力以外にあるものたる可からず。一物が一定人の法律上の處分權力内に在りてふ事は、所謂自由財に關しても、將た亦た孤立經濟に關しても、決して其物の財たる性質の前提にはあらず。財たる性質を決定する事情は、財に對する主觀的權利に非ず、財其ものなり。財に對する主觀的權利のみを以て財たる性質を定むるものなりとする説も、又は主觀的權利并に其の客體共に財たる性質を有すと爲す説も共に支持し難し。一財に對する一の主

觀的權利が財なりや否やを問題とするは恰かも、箇々の農業所有地、即ち耕地草地森林、葡萄園間に横はる境界線は、其の何れに屬するやを問題とするが如し。

予の嘗て論じたる所は左の如し。

『私有財産制度と人格の自由の認められて居る今日にあつては、財に似寄つた性質を備へて居る所のもので、而も財と混同してならぬものがある、即ち諸々の權利及關係之れである。此等は決して經濟上の財と看做す可きものでない。蓋し是等のものは經濟上の財を得る爲めの間接の手段であつて、財其物ではない、唯だ今日の私有財産制度の下にあつては、此等は經濟上の價值、殊に一定の貨幣額を以て見積られ居るものたるのである、決して財其物ではない。』(國民經濟原論、本書後段に收録す)

マ氏の無形財に關する所論の服し難きは本文に述べたり。氏は内界の財も亦富たることありと云ふ。ノイマンは經濟上にて云ふ財は全然外界の財のみより成り内界の財は包含せずとして曰く、内界の財を以て經濟上の財に算入せば、此等の財を得る方法も亦

經濟學に於て論究するを要す。然るに未だ嘗て學力を得る方法、音樂を習修する方法、體力養成法等を經濟論中に試みたるものあるを聞かず、教育學、音樂學、衛生學等は決して經濟學の一部を成すものにあらずと。

唯所謂人々との關係、殊に商業上の關係の如きは内界の財にあらずるが故に、之を經濟財なりとするもの多し。予は此説を執らず。(此點予は少しく説を改め『關係』其ものを以て、直ちに財と爲す可きものにあらずと信ずること、『權利』に於けること同一なり。雖も、此等『關係』を生ず可き行爲若しくは働きは、財と認む可しと信ずるに至れり。後段を見よ)。ノイマンは嘗て關係は財なりと主張したるも後改説せり。國民經濟原論(本書後段に收録す)に引照せり。就て看よ。

次に論ず可きは自由財と經濟財との異同是なり。マールシアルは自由財ならざるものを直ちに經濟財なりとなすものに非ざることを本文に述べたり。是れ予の私見に合す。然るに多くの學者は自由財ならざるものは皆經濟財なりと爲すもの、如し。其一例として故瀧本教授の説を擧ぐるを得可し。

一、自由財と經濟財との區別如何、

一、財とは吾人が以て吾人の欲望を充たし得可しと信する所の外界の有形財なり

(此定義は予の全然同意する所なり)

二、經濟財とは人をして之を排他的に自己の占有の下に置かんを欲せしむる如き財を云ふ、故に財が經濟財たるには左の二條件を具備せざる可からず

イ、其存在が比較的に少きこと、

ロ、其財が占有し得可きものなること、

(イは缺くも可なり、之に代へて其占有が經濟的なるを要すること、並に經濟的労働を費すものなることを加ふ可し)

三、經濟財に非ざる財は自由財なり

(其反對は自由財に非ざる財は經濟財なりと云ふこと、成る)(一橋會雜誌第四十九號)

讀者之を以て本文の論述と對照せよ。マ氏の説は少くも此れよりも勝れり。財の經

濟財たるには存在の量必ずしも少きを要せず。ノイマン曰く

Selbst vom Urwaldbewohner, auf den man in Fragen wie den vorliegenden so gern Bezug nimmt, darf letzteres behauptet werden, sobald er sich im Überfluss befindliches Urwaldholz aneignet, um sich Geräte zu fertigen. S. 16—17.

人の好んで引例する原始林に無限に存在する樹木と雖も、之を以て器具を製せんが爲めに、人が占有するときは、此は自由財にあらず、經濟財なり

而して此點より見て自由財なる語は殆んど無意義なりと主張せり。然り苟しくも人の欲望の用に供せらるゝ以上は——殊に今日の私有財産制度の下に在りては——自由財なるものは存在せず、皆非自由財なり。何となれば人の用に供せらるゝ以前、先づ占有せられざる可からず、其占有は労働を費すを要すればなり。マ氏の所謂ブラジル森林の樹木又は河海より漁獲する魚、予の高山の草花即ち皆ノイマンの謂ふ所に當れり。瀧本氏が存在の量比較的少きことを以つて經濟財に不可缺要件と爲すは、通説に従ふものなる可けれども、其通説は當を得ず。存在量無限なりとも經濟財たることあり、存在量比較的

に其意味茫漠たり)少くも自由財たるものあり。瀧本氏は津村教授を攻撃して云ふ。

「海水浴場主は此の大海に存する儘の水に對して錢を拂ふのであらうか、……通常の人が買ふのは、大海に存する水に非ずして海水浴場の門口或は浴槽の傍まで持來されたる水である、即ち無限に存するものを態々買ふのでは無くて、有限のものを買ふのである、若し其無限に存する場所へ、主人自ら出張して之を汲んだなら、錢を拂ふ必要は絶無である」津村君の説明は錢を拂ふ云々を以て要件とするものにして、論點當を得ず。然れども瀧本君の説も亦俄かに感服し易からず。無限に存する海水を主人自ら汲む場合に於ても其汲む勞働は營利の目的を以てするが故に經濟行爲なり(經濟上の勞働なり)、而して此海水を浴場に汲入るゝときは此海水は亦た經濟的に占有せられたる浴場主の所有物件なり。瀧本君は予を以て此場合の海水は經濟財にあらずと認むるものならんと言はれたれど、其は予に取りては最良の引倒なり。此場合の海水は一點の疑を容れざる經濟財なり。予は錢を拂ふ有無を以て經濟財と否との區別を爲す可しと論じたること未だ之非ず(貨幣價值を以て測らるゝ云ふは貨幣を支拂ふの意に非ざるは言ふ迄もなし)。經

濟的に占有せられ、經濟的の勞働を費したる事を以て經濟財なりと爲すなり。即ち氏は學生の答案に於て(一)存在の量無限にても、經濟財たり得(二)存在量有限にても經濟財ならざることありとの所論あるを以て、誤謬なりと斷定せられたれども予は寧ろ教師たる瀧本君に同ぜずして其門下たる學生に與せんと欲するものなり。誤謬は却て教授に在て正解は其門生にありと信ず。況んや氏の認めて正解と爲す所は、自由財ならざるものは直ちに經濟財たり、經濟財たらざるものは皆自由財と爲すに於てをや。予は斷じて此說に服する能はず。

最後にマ氏の論ずる價值に就ては別に詳論を要す。讀者先づ國民經濟原論に就て予が私説の一端を知り置かんことを希望す。

本章の参考書として先づ最も推奨す可きはノイマンの著書なり。即ち前段引照せる Neumann, Grundlagen der Volkswirtschaftslehre, Tübingen 1889.

並に同氏の寄稿を載せたる

Schonberg's Handbuch der Politischen Oekonomie. Bd. I. Tübingen 1896. SS. 146—186. Wirtschaftliche Grundbegriffe.

Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. Bd. 25. (1869). Bd. 28. (1872). Bd. 36. (1880).

を見る可し。次にはボエム・バヴェルクの書

Böhm-Bawerk, Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlichen Güterlehre. Inns-

bruck 1881. 今收めて其論文集にあり。

ザイツェルの

Dietzel, Theoretische Sozialökonomik. Leipzig 1895. SS. 149 ff.

最も讀む可し。其他經濟原論の書には凡て此問題を論じあり。就中メンガー・ザックス・ヴキーザー等の奧國派學者並に正統學者の著書參考す可し。獨逸學者の原論殊にシュモラーの原論は却て此點に就ては參考す可きもの少し。唯ワグナーは可成詳密の議論を試みたれども、獨創の意見多からず。又た純歴史派の貢獻は殆んど見る可きものあらず、甚だ惜む可きなり。

以上予は舊版に記したる所、一二字句を修正したるのみにて、其儘に掲げ置けり。然るに予は既に『國民經濟講話』全集第二集二二・二九六三〇に於て述べたるが如く、財の定義に就ては、其後説を改め、勞務給付其他の働きも、其が價值對象たるときは、又た財と認む可しとするに至れり。

有形たると無形たるを問はず、生活維持に關して我々が目的を立て、其目的を達する手段として選ぶものは、皆經濟に關係があるのであります。此を學問上の術語で、財（又は富）と名けます。財とは西洋の言葉では、善と云ふのと同じ字を以て表はして居ります。（中略）つまり、我々人間の生活を進むるもの、又は我々の生活に害あるを除くもの、之が善でありまして、財とは其手段たるものを云ふのであります。（中略）又た、富とは、我々の生活が充實した有様を云ふのであります。即ち生活の維持が十分に出來て居る状態が富であります。これと同時に、此くの如き状態を作り出す手段をも、又た富とも申します。故に經濟は、財（又は富）に關係する事なりと申す世間普通の書物によく書いてある定義も、まんざら當らない譯ではありませぬ。唯だ甚だ言ひ足らぬのであります。（全集第

二集二二頁

右説明は本書舊版に引用したる國民經濟原論本書後段に收録すの説と異なるものにして、殊に同書に於て勞働給付（勤勞）を財ならずと斷言したる一節は、全然之れを改めざる可からず。今其理由の一端を示めす可く、カール・メンガーの財論を次に紹介す可し。

メンガーは、一八七一年出版の原論第一版と、昨一九二三年其子が遺稿を整理して刊行せる第二版とに於いて、諸所に於て著しく、説を改め居れり。財論に於いても又然かり。而して總論の部に於ける彼れの改説は恰かも予の本書に於けると同じく、第一版に於いて、『因果關係』と云ひたる所を悉く改めて、或は全く之れを削除するか、或は、『目的關係』と改めたり。財論に於いても又た然り。更らに、細目の點に至つては、第二版の説明は、第一版に比して遙かに込み入り居りて却つて明瞭透徹を缺くものあり。財論に於て、其事殊に甚し。されば予は主として理路一貫せる第一版の所説を紹介し兼て第二版に於ける改説に言及することとす可し。

メンガーは第一版に於いて財を定義すること左の如し。

Diejenigen Dinge, welche die Tauglichkeit haben, in Causal-Zusammenhang mit der Befriedigung menschlicher Bedürfnisse gesetzt zu werden, nennen wir Nützlichkeiten, wofern wir diesen Causal-Zusammenhang aber erkennen und es zugleich in unserer Macht haben, die in Rede stehenden Dinge zur Befriedigung unserer Bedürfnisse tatsächlich heranzuziehen, nennen wir sie Güter.——
Carl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Erster Allgemeiner Theil. Wien 1871. SS. 1—2.
人間欲望の充足と因果關係に置かれる能性を有する諸物は之れを『利用』と名づく。吾人が此の因果關係を認識し而して其の問題となる諸物を吾人の欲望充足に事實上接近せることを得る限りに於いて、此等諸物を財と名づく。

第二版に於ては右を改めて左の如くせり。

Diejenigen Dinge, welche die Tauglichkeit haben, ein menschliches Bedürfnis zu befriedigen, sind im Sinne unserer Wissenschaft Nützlichkeiten. Sofern eine Nützlichkeit als solche erkannt und verfügbar ist, nennen wir sie ein Gut, und Güter im Sinne unserer Wissenschaft sind also zur Befriedigung menschlicher Bedürfnisse als tauglich erkannte und für diesen Zweck verfügbare Dinge. 2.
Auffl. 1923. SS. 10.

中一の人間欲望を充たす可き能性を有する諸物は、經濟學に於て云ふ『利用』なり。一の利用が、利用として認識せられ、而して處分し得可きものなるべき之れを一の財と名づく。經濟學にて云ふ諸財とは、人間欲望の充足に適せりし認識せられ、而して此の目的の爲めに處分し得らるる諸物の謂なり』(十頁)

メンガーは更らに、財の前提四ヶ條を擧ぐ、

一、一の人間欲望

二、此の欲望の充足と因果關係に置かれ得るに適せしめる物の性質

三、此の因果關係を、人間が認識すること

四、此の物を處分して、其の欲望の充足に事實上充用せしめ得ること

第二版に於ては、

一 一の人間欲望の認識若くは其の豫見

二 欲望の充足を實現するに適す可き物の客觀的性質

三 此の能性の認識

四 此の物の處分即ち此物を一の人間欲望(一の將來の而して他の諸財の助けによ

りてのみなる場合たりとも)の充足に充用し得可き様なる其物と、吾人との關係

第一版に於ては、メンガーは、以上四項に就て説明を加へ、次ぎに所謂『假想財』を論じたる後、『關係』は財なりや否やを考へて曰く、

『學問上特殊の趣味あるは、或學者等が『關係』てふ名稱の下に、一の特殊なる財の範疇と認むる諸財是れなり。此の目の下に計上せらるるものは商號得意、獨占出版權、專賣特許、レアル・グツ、エルベ・レヒト著作權等にして、更らに若干の學者は、家族友情戀愛の諸關係、教會的に學術的團體等をも算入せり。此等關係の一部分が嚴密なる意味に於ける財の性質を有せざることは、之を認めざる可からずと雖も、他の一部分、例へば、商號獨占出版權、得意、其他之に似する諸々のものは、事實上財たること明なることは、吾人が流通場裡に於て數多くの場合に於て、之を見出すてふ事情丈にて立證することを得可し一六・七頁

を、而して彼は其論を總括して左の如く云へり。

『利用ある行爲若くは行爲の停止にして、吾人が之を處分し能ふこと、例へば、得意、商號獨占

諸權の如く、事實上然るものなるときは、此れに對して、財たるの性質を認めずして、「關係」てふ曖昧なる概念の下に置き、一の特種なる範疇として、他の諸財に對抗せしむ可き理由は、適も發見せられず、否乎は信ず、財の全體は、之を二種に分ち、一は物質財ザヘンギューター（財たる限りの凡ての自然力を含みて）、とし、二は利用ある行爲ニユツツリヘンデルンゲン（若くは行爲の停止ウンデルラッスツンゲン）とし、二の中の最肝要なるものを勞務の給付とす可きものなるを」七頁

こ。予は、メンガーの四前掲なるものを必要ならずと信ず。但し、此れと粗ほ同説なるスピノに就て、本書舊版前段に揭に於て下したる程の意にては、之を認む可きものなりと信ず。（スピノは處分を云はずして『アクチエシビリタ』欲望充足に供し得可き便宜性を云ふ、メンガーに比して劣れり）四前掲中、必要なるは、一、三、四にして、二は決して必要ならざればなり。但し、一は決して直接消費者の欲望たることを要せず、商人が自己の欲せざるものに高き價を拂ふは、自己消費の欲望を認め若くは豫見するが爲めにあらず。之れに反し、メンガーが第二版に於て、總括的に言明したる右の最後の一節は、予を促して、前云へる改説を爲さしむるに、大いに參考となりたるものなり。然るに惜む可し、第二版

に於ては、メンガーは甚だ不徹底なる蛇足説を加へて、其態度を晦澁ならしめ、却て右にあげたる明瞭なる總括の辭は、全く之れを削除して、態度を漠然たらしめたり。予は之れを一の退歩と認めざるを得ざるものなり。

抑も、經濟學に於て財てふ概念を要用なりとする所以は、欲望充足の手段たり、經濟行爲の對象たり、吾人の占有及び處分の目的物たり、有償的獲得の客體たり、從て、吾人の價值判斷價值比較の客體たるものを一言を以て云ひ表はさんが爲めに外ならず。換言すれば、價值對象ワルトシュツツツンと云ふ意を的確に言表はさんが爲めなり。故に財の概念を狭く物質財（ザヘンギューター）のみに限る時は、其外に、財たらずして、而かも、價值對象たるものを一括的に若くは列舉的に指示す可き、他の語若くは概念を要することゝなるを免れず。而して、此く財と財以外の價值對象とを二つの別の概念とすることによつて、果して概念の明確を増すやと云ふに、事實は決して然らず、却て其の晦澁を將來する結果を見るに過ぎず。其は實にメンガーが次の言によつて道破したるが如くなるの外之れあらざる可し。

Wenn nichts destoweniger derjenige Theoretiker, welcher sich am eingehendsten mit diesem Gegen-

stand beschäftigt hat, zugesteht, dass die Existenz dieser Verhältnisse als Güter etwas auffälliges an sich habe und dem unbefangenen Auge wie eine Anomalie erscheine, so liegt der Grund hiervon, wie ich glaube, in der That etwas tiefer, als in dem unbewusst auch hier wirkenden realistischen Zuge unserer Zeit, welche nur Stoffe und Kräfte (Sachgüter und Arbeitsleistungen) als Dinge, und somit auch nur solche als Güter anerkennt.

Es ist von juristischer Seite schon mehrfach hervorgehoben worden, dass unsere Sprache keinen Ausdruck für "nützliche Handlungen" im Allgemeinen, sondern nur einen solchen für "Arbeitsleistungen" habe. Nun giebt es aber eine Reihe von Handlungen, ja selbst von blossen Unterlassungen, welche, ohne dass man sie Arbeitsleistungen nennen kann, doch für bestimmte Personen entschieden nützlich sind, ja einen sehr bedeutenden wirtschaftlichen Werth haben. Der Umstand, dass Jemand bei mir seine Waaren einkauft, oder meine Dienste als Advocat in Anspruch nimmt, ist sicherlich keine Arbeitsleistung desselben, aber eine mir nützliche Handlung, und der Umstand, dass ein wohlhabender Arzt, der in einem kleinen Landstädtchen wohnt, wo sich ausser ihm nur noch ein anderer Arzt befindet, die Praxis auszuüben unterlässt, ist noch viel weniger eine Arbeitsleistung des Erster-

en zu nennen, aber jedenfalls eine für den Letzteren, der hierdurch zum Monopolisten wird, sehr nützliche Unterlassung. —

Was man demnach Kunden-Kreise, Publikum, Monopole etc. nennt, sind, vom wirtschaftlichen Standpunkte aus betrachtet, nützliche Handlungen, beziehungsweise Unterlassungen anderer Personen, oder aber, wie dies zum Beispiel bei Firmen der Fall zu sein pflegt, Gesamtheiten von Sachgütern, Arbeitsleistungen und sonstigen nützlichen Handlungen, beziehungsweise Unterlassungen. Selbst Freundschafts- und Liebesverhältnisse, religiöse Gemeinschaften u. dergl. m. bestehen offenbar in solchen uns nützlichen Handlungen oder Unterlassungen anderer Personen. I. Aufl. SS. 5—7.

然るにも拘らず此問題を最も立入りて研究したる學者（ブルハルト・シェフエを云ふ）が此等の『關係』の財としての存在は異様の觀を與へ、因はれざる人に取りては一の變態の如く見ゆと告白したるは材料乏力（物質財と勞務の給付）そのみを物と見從つて此等のもののみを財と認むる現代の現實的傾向が此問題に就ても無意識の間に作用する云ふよりも、更らに深き根據を有することゝ予は信ず。

法律家が屢々指摘したるが如く吾人の言語は『勞務給付』に對する成語を有するのみ

にて、一般に『利用ある行爲』を言表はす可き成語を缺けり。然るに勞務給付を名くる能はざるものにして、而かも、特定の人々に取りて、確かに利用あり、否な著しき經濟價值を有する行爲又は單なる行爲の停止の場合數多くあり。或人が予が店に來りて、其の欲する商品を買ひ、又は辯護士たる予に事件を依頼するてふ事情は、確かに勞務の給付にあらず、然かも予に取りては利用ある行爲なり。田舎の小都會に於て一人の富有なる醫師が、其業務を罷め、其都會に残る所は今一人の醫師となるときは、其人は獨占者となる可し、前者の業務停止は決して勞務の給付にあらず、されど後者に取りては甚だ利用ある行爲停止なり。(中略)

從つて、得意公衆獨占等と名けらるゝものは、經濟上の立場より見るときは、他人の利用ある行爲若くは行爲停止なるか若くは、商號等の場合に於けるが如く、物質財・勞務給付、及其他の利用ある行爲若くは行爲停止の一體なり。友情戀愛の關係、宗教的團體、其他の如きも、明かに此種の吾人に利用ある他の人々の行爲若くは、行爲停止なり。

メシガーは、茲に結論を下して、前段示したる如く、財を二種に小分して (一) 物質財 (二) 利用ある行爲又は行爲停止 (其最重要なるものは、勞務給付) なりとし、『關係』を利用

ある行爲と見特に『關係』の目を立つる必要なしとせり。メンガーの利用ある行爲若くは、行爲停止 (nützliche Handlungen oder Unterlassungen) と云ふは、必竟價值對象たる行爲若くは行爲停止の謂に外ならず。即ち言葉を改めて、之れを云へば、

價值對象——財——物質 (有形財)

行爲又は行爲停止 (勞務給付を其重なるものとす)

となる可きなり。第二章本文の説明は、この解釋を必ずしも牴觸せず、唯補論に於て舊著『國民經濟原論』の權利關係勤勞凡て財に非ずてふ説を裏書したる點は、右解釋と相容れず。而して、予は、メンガーが其原論の第一版に於て述べたる説を以て、妥當なりと認むるに至れるものなれば、補論の之れと矛盾する部分は、之を改め『國民經濟講話』に於ける説明の如くせざる可からず。唯、予は、予の思考の徑路を明かにし置かんが爲め、本章補論を、先づ舊版に従ひて、之れを掲げ、其改めたる部分を後に示すこととしたるなり。猶參考の爲め、最新刊たるデールの『理論的國民經濟學』第二卷『生産理論』の財論を舉ぐれば、左の如し。

Die wirtschaftlichen Güter. — Die mit Hilfe der menschlichen Tätigkeit erzeugten Dinge nennen wir Produkte. Dabei ist zu beachten, dass "Produkte" ein technischer Begriff ist. Erst wenn wir diese Produkte unter wirtschaftlichen Gesichtspunkten betrachten, nennen wir sie Güter. Die Produkte bilden einen Teil der grossen Kategorie der wirtschaftlichen Güter überhaupt. Der Begriff des Gutes geht über den der produzierten Güter hinaus; denn Güter sind alle Dinge, die zur Befriedigung menschlicher Bedürfnisse geeignet sind. Zum besseren Verständnis des Begriffes Gut sind einige terminologische Feststellungen erforderlich. Wir unterscheiden:

1. Gebrauchsgüter und Verkehrsgüter:
2. Freie und wirtschaftliche Güter:
3. Materielle und immaterielle Güter:

Auch insofern geht der Begriff Gut über den der Produkte hinaus, weil zu den wirtschaftlichen Gütern nicht nur greifbare materielle Sachgüter gehören, sondern auch immaterielle und unkörperliche Dinge. Güter sind auch Naturkräfte; wie die Wasserkräfte, Wasserfälle usw. Ebenso gehören zu den Gütern persönliche Dienstleistungen, wie z. B. die des Arztes, des Rechtsanwaltes usw.

Sehr umstritten ist die Frage, ob auch gewisse Rechtsverhältnisse, wie z. B. Monopole, Erfinderpate, Verlagsrechte usw. zu den wirtschaftlichen Gütern gehören. Diejenigen, welche solche Rechtsverhältnisse zu den wirtschaftlichen Gütern rechnen, argumentieren so: Solche Patent- und Verlagsrechte z. B. haben Wert und Preis, werden ge- und verkauft, figurieren in den Bilanzen mit festen Geldsummen, unterscheiden sich daher nicht von den übrigen wirtschaftlichen Gütern.

Ich möchte mich dagegen aussprechen, solche Rechtsverhältnisse zu den wirtschaftlichen Gütern zu rechnen. Denn was bedeuten diese Rechtsverhältnisse? Auf Grund eines Patentrechtes hat der Patenthaber das Recht, gewisse Artikel allein herzustellen und zu verkaufen. Das Verlagsrecht sichert dem Autor das Recht, bestimmte Leistungen allein zu vertreiben. Es geht aber nicht an, mit demselben Begriffe Güter selbst und gewisse Rechtsverhältnisse, auf Grund deren man Anspruch auf Güter und Leistungen hat, zusammenzufassen. Ich halte es daher für zweckmässiger, diese Rechtsverhältnisse aus dem Kreise der Güter auszuschneiden und dort, wo wir ihnen begegnen, den Ausdruck geldwerte Rechte zu setzen. Bei der Definition, von Vermögen sagen wir daher: Vermögen ist der Inbegriff der Güter und geldwerten Rechte, über die jemand frei verfügen kann.

4. Verbrauchbare und dauerbare Güter.

5. Genußgüter und Produktionsgüter.

Karl Diehl, Theoretische Nationalökonomie. II Bd. Jena 1924. SS. 36—38.

經濟財。

人間行為の助けによりて作り出されたる諸財を『產物』と名く。茲に注意す可きは『產物』とは技術的概念なることは是れなり。此等產物を經濟的見地より考察するとき始めて此れを『財』と名く。產物は經濟財てふ概念以外に互るものなり。何となれば財とは人間欲望の充足に適する一切諸物の謂なればなり。財てふ概念をより善く諒解せしめん爲め若干の用語を確定し置く必要あり。

一、消費財と流通財（下略）

二、自由財と經濟財（下略）

三、有形財と無形財

財てふ概念が產物てふ概念以外に互る理は、經濟財には、捕捉し得可き有形の物質財のみならず同時に無形・無體物をも含むことによりて知り得べし。水力・藻等の如き自然力も亦財なり。又た醫師・辯護士等の人的勤勞・給付も亦財なり。大に議論の存するは、或種の法律關係例へば、獨占・專賣・特許・著作等の如きものが、果して財なりや否やの問題是れなり。此等の法律關係を財に計上する論者は曰く、專賣・特許・權・著作權の如きは、價值と價格とを有し、賣り買せられ、確定の貨幣額を以て貸借對照表に計上せらる、從つて他の經濟財と何等分つ所なしと。 (ボエム・パッセルク『國民經濟的財論の立場より見たる權利及關係』、インスブルック一八八一年刊を一九二四年刊同氏全集第一頁以下に收む見よ)。

予は右の説に反對して、此種法律關係を財に計上するを非とするものなり。何となれば、此等法律關係は、抑も何を意味するか。一の專賣・特許權を有するものは、此れによりて或種の品物を、自己のみ作り出し、販賣し得る權利を有するものなり。著作權を有する著者は、特定の給付を自分一人にて營むの保障を與へらるゝものなり。されば財共のもの、財及給付に對する權利を與ふる或種の法律關係とを、同じく財てふ概念の下に包含するは當を得たるものと云ふを得ず。予は此等の法律關係を財以外に分離し、此れを『貨幣

價值を有する諸權利』と名けんを欲するものなり。従つて財産を定義するに方りては、財産とは、或人が自由に處分し得る諸々の財と貨幣價值を有する諸々の權利との總體なりとす可きものなり。

四、消費財と永続財

五、享樂財と生産財

デールの右説は粗ぼ上述の私説に近し。雖も彼は生産に技術的・生産と經濟的・生産の別ありとし、技術的・生産には定義を與へたれども、經濟的・生産は唯之れを迂回的に『生産能性』『収益性』に就て論ずるに止り、終いに明確なる定義を與ふることなく、其困難を回避したり。財の定義に於ける亦これに似たり。今一々之れを評論せず、讀者前述の予の説と比較して、自ら之れを判ぜよ。

右デールの説に比するときは、一八八七年に於て、既に左の如く道破したるシュタインの卓見は敬服に堪へたるものと云はざるを得ず。

Das Gut ist demnach, seiner formalen Definition nach, das bestimmte natürliche Dasein, das durch

Wille und That der Bestimmung der Persönlichkeit, welche in dem Bedürfniss empfunden wird und dem bestimmten Gegenstand gegenüber Zweck heisst, unterworfen ist und damit das persönliche Leben neben seiner natürlichen Kraft zum Inhalte empfängt und dasselbe erfüllt.

Das Gut ist daher nicht eine Sache, sondern es ist vielmehr nur eine ganz bestimmte Beziehung der Sache zur Persönlichkeit. Das was wir das Gut nennen, ist zugleich ein Gegenstand, eine Sache, ein Besitz, ein Eigentum, und anderes, das Wort "Gut" bedeutet neben allen jenen Begriffen nur diejenige Qualität des Objectes, vermöge deren es dem persönlichen Zwecke entspricht. Es kann daher etwas ein Gut sein und kein Gut sein obgleich es als Gegenstand oder Eigentum absolut dasselbe bleibt; denn das Gut ist nur das Verhalten des Gegenstandes zu einem Zwecke der Persönlichkeit. Dieses Verhältniss, das nie im Wesen des Gegenstandes liegt, wird nur erzeugt durch die persönliche Kraft in welcher das Bedürfnis und seine Entwicklung sich an ihm betätigen. Das Gut ist mithin seinem Wesen nach ein Werden; sein Name bedeutet einen Prozess dessen Inhalt die Güterbildung ist und dessen Auflösung in seine Momente den Begriff desselben zu einem organischen macht. Die Lehre von dem gegenseitig bedingten Verhältniss seiner einzelnen Momente zu einander aber bildet die Lehre

oder die Wissenschaft von dem Gute und der Güterbildung an sich, in ihrer Unterscheidung vom wirklichen Gute, welches letztere erst durch die Besonderheit der Individualität und der natürlichen Kraft erzeugt wird.

Ist demnach das Gut in der That ein in einem Worte zusammengefasster Prozess, so enthält es die drei Momente desselben, die Produktion, die Consumption und die Reproduction als Einheit; jeder dieser Begriffe——das ist jedes Stadium jenes Processes ist wieder ein organisches Ganze für sich; das Gut ist in keinem derselben für sich erschöpft; die Gesamtheit der Elemente seiner Bewegung aber nennen wir die Güterbildung.

Lorenz von Stein, Lehrbuch der Nationalökonomie. 3. Aufl. Wien 1887. SS. 99-100.

財とは其の形式的定義に従へば、一定の自然的存在にして、欲望に於いて感ぜられ、而して一定の對象に對して目的と稱せらるゝ、人格の決定に、其の意思と行爲とによつて、服従せしめられ、之れによつて、人格生活を、其の自然的力と相並んで、其の内容として受け入れ又た之れを充實するものなり。

故に財とは單純なる物の謂に非ず、物の人格に對する一定の關係を謂ふものなり。吾人

が呼んで財と爲す所のものは一の對象たり、一の物たり、一の占有たり、一の所有たるものなり。換言すれば、「財」なる語は、以上の概念と相並んで客體を人格の目的に適應せしむ可き性質を意味す。されば、對象又は所有ととしては、絶對的に同一たりとも、場合によりては財たることあり、又財たらざることあるものなり。何となれば、財と云ふことは、人格の目的に對する對象の關係の謂に外ならざればなり。此關係たる決して對象の本質に存するに非ず、人の欲求と其發達とが對象に作用する人格の力によつて作り出さるゝものに過ぎず。従つて財とは、其本質に於いて一の生成にして、其内容は諸財の形成にして、其要素への解消は、其の概念をして、有機的のものたらしむる一過程の謂なり。財の箇々の要素の相互制約關係を考究する理論は、財と財の形成其ものゝ理論又は學問にして、之れと分つ可きは、箇人性及び自然力の特殊性によつて作り出さるゝ現實財の理論之れなり。

かく、財とは一の過程を一語にて言表はしたるものにして、生産・消費及再生産の三要因を一の統一體とするものなり。此等は、以上の過程の其れ／＼の段階にして、其概念は、其れ自らに於いて一體を爲すものなり。而して其何れも財の概念を網羅し盡するものにあり。

らず。財の運動の諸要素の全體は、右何れの語を以ても盡されず、されば吾人は之を財の形成でふ語を以て言表はさんとする。(經濟學教科書第三版九〇—一〇〇頁)

猶ほ、

Platter, Grundrissen der Nationalökonomie; kritische Einführung in die soziale Wirtschaftswissenschaft. Berlin 1903.

には開卷劈頭に財論を掲げ勤勞及關係(權利を含めて)を財なりとする説に對し、簡潔なれども論鋒鋭き評論を試みたり。同書一—十一頁を見る可し。

第三章 生産・消費・勞働

人は有形物を創造する能はず、思想上に於ては新思想を創造することを得るも、有形物は然らず。有形物を生産すと云ふは物の創造に非ず、努力又は犠牲を供するにより、有形

物の形態を變じ、又は之れを排列して欲望をより、善く充たす可く適應せしむるを意味するに過ぎず。即ち其生産せらるゝものは物其自らに非ず、物の利用是れなり。此點より云ふときは商業は生産なりや否やの問題は、畢竟無意義と云はざる可からず、商業も亦時と所の上に於ける努力又は犠牲によりて物の利用を増殖し、又は之を生産するものなること、他の業務と異らざる一の生産業なり。近來米國の學者中、中古學者の説を襲踏し、商業を不生産的なりと主張するものあり。其意、商業は社會に益なき無用物なりとするにあり。是れ畢竟商人の數必要以上に多く、他業に轉ずれば社會の益を爲すものが徒らに商業にのみ集る時勢の風潮に慨する所あるが爲なる可し。然れども工業にても農業にても必要以上の人數之に従事する時は其過剰人數は均しく無用のものたる可し。商業に限りて、無用なるにあらず。論者は現時の商業組織殊に小賣業組織の不完全をこそ非難攻撃す可けれ、商業其物を以て直ちに長物なりとし、之れを生産行爲に非ずと論ずるは議論の正鵠を失へるものなり。狭き意味に於ける生産業(農工業を云ふ)は物の形態と性質とを變化し、商業及運送業は物の外的關係を變化するものにして、均しく之に依

りて、利用を生ずる生産業なり。

以上マ氏の説く所果して當れりや否や。氏が思想界に於て創造あり、物質界に創造なしと云ふは却つて自殺的論法に陥るものにあらざるか。物質界の生産は利用を創造すると、思想界の生産の思想を創造すると、何の異なる所がある。又商業を生産にあらずと云ふは必ずしも商業を蔑視するの意にあらず。學者の著述は必ずしも經濟上の生産にあらず、之を賣りて貨幣を得るときのみ經濟上の生産なり。新思想を創造し之に依りて經濟上の利益を得るとき（發明・發見・新機械の案出等の如き）は、此れ亦經濟上に於ける生産にあらずや。予は亦通説の利用を生ずるを以て生産なりと説くに直ちに首肯する能はざるものなり。マ氏は本文に於て利用の意味を詳述せず、後に第三編第六章に至りて之を論ずると雖も、利用なる語の内容を明示するとなし。單に利用を生ずるもの決して經濟上の生産にあらず、學者の研究は學術的利用を生じ、音樂家の技能は美的利用を生じ、宗教家の布教は道德的利用を生ず。而も此等は直ちに經濟上の生産とはならず。されば利用なる語を以て、生産の意義を限定するには、其は常に經濟的利用の意に解するものな

らざる可からず、然るに經濟的利用は即ち價值なり。故に予は生産を以て經濟的價值を生じ又は増す行爲なりとする一派の學者の所論は、少くともマ氏の右定義に勝れるものと信ず。要するに單に生産と云ふのみにては、殆んど意味を成さず、productive of what『何の生産なりや』の問題を豫め定め置くを要す。此問題は、之れに答ふること容易ならず、予は姑く、マルクス以下諸學者に従つて、生産とは *wertschaffende Thätigkeit* 『價值を生ずる行爲』なりと言はんとす。然らば生産と經濟行爲の別如何。經濟行爲は皆生産なりや、生産は皆經濟行爲なりや。答ふ、生産は皆經濟行爲なり、經濟行爲は必ずしも生産のみに限らず。

經濟行爲
生産たるもの
生産たらざるもの

生産たらざる經濟行爲の重なるものは、射倖行爲の如き是なり。人或は謂はん、射倖行爲も亦價值を生ずるものなり、株の賣買によりて利を營むものは、價值を生ずるものなりと、予は此説に與せず。

然れども一般に之を云へば經濟行爲と生産とは多くの場合に於て同義語と解して差支なし。フックス曰く

Der Zweck ist bei Arbeit im wirtschaftlichen Sinn der Zweck der wirtschaftlichen Tätigkeit; die Güterbeschaffung. Arbeit als Begriff der Nationalökonomie ist daher die mit Kraftaufwand verbundene Güterbeschaffung oder "auf Wertschaffung gerichtete Tätigkeit" Volkswirtschaftslehre, S. 62.

經濟上の勞働の目的は經濟行爲の目的と同じく財の獲得（即ち生産）是なり。故に經濟學にて云ふ勞働とは、力の費用を要する財の獲得、又は價值發生を目的とする活動なりと云ふ可きなり

と。此言予が所論に近し。

マ氏は次に消費を論ず。曰く、消費は消極的生産なり。生産せらるゝものは利用なるが如く、消費せらるゝものも亦利用のみ、物其自らを消費するに非ず、即ち消費とは生産の反對に物の按排又は變形によりて、其利用を減却する行爲を云ふ。而して又消費には必ずしも利用を消滅せず、單に利用あるものを使用するが爲め、之を保持する場合あり。シ

ニオア曰く

"They are destroyed by those numerous gradual agents which we call collectively time".

總稱して時と名くる數多の漸次的働因によりて破毀せらるゝもの

是れ即ち物の持續的所持を消費と稱するの意なりと。予は消費を解して次の如く言はんとす。消費とは價值を減じ又は消滅せしむる行爲を云ふ。

マ氏は次に消費財と生産財との別を論じたれども既に前々章に於て述べたる所に加ふる所なく、氏も亦別段の必要なしと云ふが故に、茲に紹介せず。

次にマ氏の論ずるは勞働の概念なり。勞働とは總て或結果を生ずる目的を以てするものなり。娛樂の爲めに遊戲に従事するは力作（exertion）を要すと雖も、此は勞働にあらず。されば勞働は左の如く定義す可し。

『勞働とは其自分より直接に生ずる快樂の爲めにせず、一部若くは全部間接の利益の爲めにする心身の力作を云ふ』

即ち勞働の要件は

一 心身の力作なること

二 其自分の爲めにせず或他の目的に向つての手段として營むこと

是れなり。而して元來勞働は其目的を達せず従つて何等の利用を生ぜざるときのみ不生産的にして、其他の場合には皆生産的と云ふ可きものなり。然れども生産的なる意義は種々の變遷を経て、今日に於ては直接並に一時的享樂の爲めにするものを含まず、蓄積せられたる富を生産するものを生産的と呼ぶに至り、殊に現在の欲望の爲めにするものを除外して、唯將來の欲望に供へらるゝものを生産するのみを生産的と云ふを慣例とするに至れり。勿論現在一時的の欲望の爲めにするよりは、將來の永久的欲望の爲めに勞働する方、大體に於て社會の富を増進するに與つて力あり。されば、生産的なる語を専ら將來の爲めにする場合のみに限るは不當ならずと雖も、多くの學者が此點を過重視して、極めて狹隘の説を主張し、従つて一時的の用に供する多くの職業を不生産的なりとして之を貶するに至れるは可ならず。例へば家内の勤勞に従事する僕婢の如き、此種論者は看做すに不生産的勞働を以てす。元より過剰の家内の勞働は無用なり、而も所謂狹義

の生産的勞働者にも過剰無用のものあり。家内勞働者を目するに、悉く不生産的勞働者を以てするは非なり。

故に單に生産的てふ語を用ゆるときは『生産要具及永久的享樂の基たるものを生産する』の意に解す可きものなり。然れども元來此語の意義は漠然たるものなるが故に、精密の議論には、漫に使用するを戒む可きものなり。而して茲に謂ふ意味と異りて、此語を使用するときは必ず爾く明言するを要す。例へば『必要品を生産する』の意に於て生産的なる語を用ゆる場合の如き是れなり。

次に生産的消費なる語あり。此語を術語として用ゆるときは『新なる富の生産に富を充用する』の意ならざる可からず。従て生産的勞働者の消費は皆生産的消費と云ふ可からず、其中生産力を維持するに必要な部分のみを生産的消費と云ふ可きなり。此語は富の蓄積を論ずるに方りて、有用なる語なれども誤解せられ易きを免れず。蓋し消費は生産の目的なり、終局なり、而して健全なる消費は皆何等かの利益を生産するものならずんばならず、而も其多くは直接に物質的富を生産するものに非ずと。

予は既に生産的なる語を前に定義したり。マ氏が將來の欲望の用に供す可き蓄積したる富を生産するを以て生産的とし更に之を詳述して生産要具を生産し、又は永久的享樂の基たるものを生産するの意なりとするは、狹隘に失するの憾あり。實際に於て以下マ氏の所論並に大多數の學者の所論に於て生産的なる語を用ゆるには、決して如斯狹隘の内容を以てせずより、廣き意に於てす。故に予はマ氏の定義に服する能はず。汎く經濟的價值を生ずる勞働は、皆生産的勞働なり、家内勤勞の如きは無論生産的勞働なり。

予は價值を生ずと云ひて利用を生ずとは言はず。即ち均しく『パン』を焼く行爲にしても『パン』焼職人の爲すは勿論勞働なり、家内の『クック』の焼くも亦勞働なり。然れども主人自ら若くは主婦自ら『パン』を焼く行爲は勞働に非ず、何となれば前者の『パン』を焼く行爲は、之れによりて經濟的價值を生じ、從つて之れに對する報酬を得るが爲めに、其勞働に従事するものなるも、後者の『パン』を焼くは、それを以て直ちに食用に供せんが爲めにするものにして、其勞は其自らに終るのみにして、報酬を得んが爲めにするものにあらざればなり。蓋し經濟上の勞働はマ氏の説くが如く、直接にそれに依りて欲

望を充たすものを謂ふにあらずして、他の目的の爲めの手段として營み、間接に欲望を充たす行爲を云ふものなればなり。マ氏は其脚註中にジェヴォンズが力作の内苦痛を伴ふものゝみを以て勞働と爲すを駁撃せり。予は却てジェヴォンズに與するものなり。即ち予は勞働を定義して左の如く云はんとす。

勞働とは

- 一 心身の力作 (exertion) なり、
 - 二 其力作は其自ら目的たらず、他の目的の爲めの手段として營まるゝものなり、
 - 三 其他の目的とは貨幣價值を有するものなり、
 - 四 從て此力作は苦痛を伴ふものなり、
- 而して予は勞働は凡て皆生産的なる可きもの、不生産的勞働なるものなしと斷言せんとするものなり。今表を以て示さんに

生産行爲	勞働
非生産行爲	非勞働

なる。

心身の力作は普通之を分けて、(一)勞働 (二)遊戲と爲す。フックス曰く、

Arbeit im technischen Sinne bedeutet im allgemeinen Kraftäusserung, Umwandlung einer Energieform in eine andere; so spricht man auch von einer Arbeit des Tieres, der Maschine. Im engeren Sinne bedeutet Arbeit die des Menschen, unterschieden vom Spiel durch den äusseren Zweck. —

Fuchs, Volkswirtschaftslehre. 4. Aufl. Leipzig 1922. S. 67.

技術上の意味にて汎く勞働と云ふときは力作即ち一の「エネルギー」態を他の態に變化することを云ふ、従つて獸畜の勞働器械の勞働等と云ふ。狭き意義にて云ふときは、勞働は人間の力作にのみに限る。而して其遊戲と分つ所は在外目的の如何にあり

然れども力作にして勞働ならざるもの、直ちに悉く遊戲たるに非ず、文學者の著作學者の研究美術家の製作は、之を遊戲と名く可きや。元よりシルレルが嘗て用たる意味にては、此等皆遊戲なる可し。然れども其は文學的意味に於て然るものにして、直ちに取つて學術的の用法とは爲し難し。

心身の力作の勞働たるには、他の目的の爲めの手段として營まるゝを要することは、マ氏も亦ジェヴォンスに倣ひて之を認む。全然予の私見に合する所なり。然るに氏は、其苦痛を伴ふ力作なること (Painful exertion) を否認し、又其他の目的なるものは、貨幣價值を以て測られ得可きものなることを言はず。苦痛とは必ずしも心身を損害するの謂にあらず、氏はジェヴォンスを駁して、無爲は却て苦痛なりと云ふ。心身の力作が苦痛を伴ふことは、力作其物が苦痛なりとの意にあらず、其自らより直ちに快樂を得ず、他の目的を達して快樂を得るが爲めの手段として、先づ其心に欲せざる力作を爲すこと、其事情は苦痛を伴ふものにあらずや。人あり一襲の美服を得ん、其美服を得るは即ち彼に快樂を與ふ。然れども之を得んには、先づ貨幣を得ざる可からず、貨幣を得んが爲めには、數日間力作せざる可からず、此力作は直ちに快樂を與へず。若し之を爲すを要せずして、直ちに美服を得るを得ば、彼は勿論此力作に従事せざる可し。即ち此力作は一の「必然の惡」として爲すものなり。之をしも苦痛を伴はずと云ふか。其理有る可からず。

他の目的なるものが、貨幣價值を有せざれば、勞働に非ず。學者文學家音楽家の力作は、

貨幣價値の收得を目的とせざるべきは勞働に非ず。否商人職工の力作も雖も貨幣價値を有する目的に向ての手段たらざるべきは勞働にあらず（商人が商人として營むにあらずる力作は勿論商人として營む力作にても例へば時に得意の顧客を招待して饗應するが如き饗宴自らが目的に非ずして自己商店の廣告の爲めに爲すべきと雖も其目的は直接には貨幣價値を有せざれば其爲めに奔走する勞は經濟上の勞働に非ず。而して勞働なる力作が苦痛を伴ふは多くは其目的が貨幣價値の收得に存するが爲なり。同じ勞にても貨幣獲得の爲めにすこの自覺は大抵の人に快からざる感を與ふ。貨幣に關係なきときは其に數倍する勞にても猶人に快感を與へ、樂しき刺激となること多し。學者の著述に従事する純粹に眞理の究明を目的とするときは、寢食を廢して之に従事して猶甚だしき疲勞を覺へず、否多々益々彼を刺激す可き快感を喚起するも、金錢を得んが爲めに之を爲すべきは、業遅々として進まず、僅の勞務直ちに彼を倦ましめ、彼を疲らしむるに非ずや。勞働の概念中苦痛並に貨幣價値の收得の二要件、決して其一をも缺く可からざることを知る可し。

次にマ氏は生産的消費なるものを説く。是れ多くの學者の執る通説なり。之れに對してマルクスは消費的生産なるものを説けり。然れども兩者共に多くの學術的價値を有せず、詳論の要を見ず。

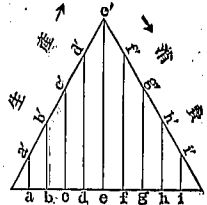
マ氏は猶此章に於て必要物なる概念を提げて稍々詳細の説明を與へたり。其論一に常識論の範圍を出でず、故に全く之を省く。

第三章 補論

生産の概念と消費の概念とは全然正反對なるが如く本文に説けり。然れども仔細に之を考ふるべきは其限界必ずしも明確ならず。普通家内に於て食物を調理し衣服を作り食物を喫し衣服を被むる行爲は之を消費と云ふ。然れども米を耕作する農夫之を運送する車夫之を精白する精米業者之を賣る商人の爲す所は、畢竟するに此米を以て食用

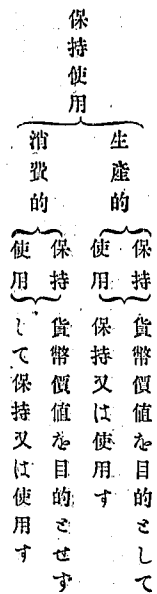
に供せらる可き状態に持來すが爲めに外ならず。然るに米商より買ひたる米は、之を磨ぎ之を炊き、之を飯櫃に納れ、之を食器に盛り、之を口中に運び、之を咀嚼し、之を消化してこそ、始めて人を養ふの用を爲すなり。然るに米商の爲す所までは生産行爲にして、其以後は全然正反對なる消費行爲なり、前者は利用を生じ又は之を増すものにして、後者は利用を減じ又は之を消滅せしむるものなり云ふ、一見甚だ奇なる區別を設くるは、其の意を得難し。田舎より都會の米商へ米を運送するは、其利用を増すものにして、米櫃より釜へ米を運ぶは、其利用を減ずる行爲云ふ、粉を變じて米を爲す農夫は、利用を生ずるものにして、米を變じて飯となす下婢は、利用を消滅せしむるもの云ふ、玄米を精白するは、生産にして、白米を磨ぐは、消費なり云ふ、甚だ服し難きに似たり。マ氏が本文に説く所に從へば、即ち此奇妙なる結論に到達せざる能はず。然るに予の所論よりすれば、此の難問は之を撤するこゝ容易なり。利用の發生、又は消滅、が生産と消費との區別の限界に非ず、消費も亦多くは生産に均しく、利用を増し又は之を發生せしむるものなり。故に利用を標準とするときは、總て生産あるのみ、消費なるものある可きに非ず、米を磨ぎ、之を炊き、之を

喫する皆其利用を増進する行爲なり、而も此等の行爲は生産に非ず、消費なり。何故然るや。農夫車夫米商精米業者は皆貨幣價值を生ずるの目的を以て其行爲に従事す。此等は皆其米を食はんが爲めに力作するものに非ず、其力作は一つの手段のみ。其營む力作は其米に體現せらる、貨幣的價值を生じ又は増すを以て目的とす。故に予が本文に下したる定義に従て、生産なり。然るに家内に在て、之を磨ぎ、之を炊き、之を喫するは、米の利用を増加せしむるも、其貨幣的價值を減じ又は減却せしむるが故に消費なり。されば、同一の行爲にても、其が貨幣的價值を増し、若くは増さんことを目的とするときは、消費にあらず、生産なり。例へば飲食店に於て客に供へんが爲めに米を炊くは、生産行爲にして、消費行爲にあらず。即ち生産と消費との分界とは、貨幣的價值に對する其地位を以て定む可きものなり、利用を以て定む可きものにあらず。今之を表示すれば左の如し。



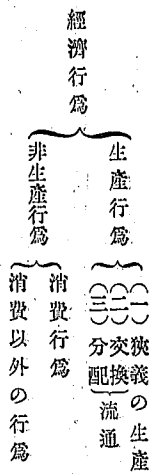
a' b' c' d' e' f' g' h' i' は、貨幣的價值を示す

而してマ氏が論ずる物の保持又は永續的使用の場合も亦た同じ。即ち米商が其倉庫に他日販賣せんが爲め保持する米は、生産的に保持せらるゝものにして、之を購ひたる人が、他日の食用に供せん爲め米櫃中に之を保持するは、消費的保持なり。貨幣價值を増さん爲めに永續的に使用するは生産的使用なり、然らざる使用は消費的使用なり。



氏は反之して、保持及永續的使用は凡て消費なりとするもの、如し。予は其説を採らず。經濟學普通の區別に従へば、生産交換分配消費の四あり。然るにマ氏は根本概念として、生産と消費のみを論じて、交換と分配を説かず。其眞意那邊にありや知る可からず。

予は氏の爲す所を以て、當を得たりと信ずるものなり。蓋し生産と消費とは、第一次的概念なり、之に反して交換と分配とは、第二次的概念なり。生産消費の二概念、否寧ろ生産だけの概念さへ定まれば、交換分配の概念は、之を定むること容易なり。生産の概念こそ最も根本的なり。予が前段に論ずる所に、生産の概念を定むれば、以て足れりとせしは此故なり。然れば今日に於ては、經濟行爲は生産と然らざるものに、二大別すれば足れり。之を四小分するの必要なし。殊に所謂交換分配の經濟行爲たるものは、多くは、其内、生産行爲と稱す可きものに屬するものなり。されば、



右表の如く解して概ね差支なし。何となれば、交換と云ひ分配と云ふ、(兩者を一括して流通と云ふ可し) 多くは同じく貨幣價值に關係ある經濟行爲なればなり。

斯く解したる生産行爲と勞働との關係如何と云ふに、勞働は多くは狭義の生産に屬す。

即ち

狹義の生産 勞働たるもの
勞働たらざるもの

なり云ふを得可きなり。然らば狹義の生産中、勞働たるものと、勞働たらざるものと、別如何云ふに實際に於ては、勞働とは心身の力作を爲すに、自己の創意を以てせず、又自己の爲めにせずして、他人の創意を受け、他人の爲めにする場合を云ふものなり。即ち勞働を營むものは其勞働を他人に給付するなり故に獨逸語にては特に『勞働の給付』(勞務給付とも云ふ) Arbeitsleistung 云ひ、英語にては『勤勞』(又は勤務) service 云ひて此意を表示す(但し英獨二語必ずしも全然同義なり云ひ難し)。

他人の創意に基き、他人に給付する力作 勞働
自己の創意に基き、自己の爲めにする力作 非勞働

とするを得可し。此意味に於ける勞働は通説に於て多く財を看做さるゝも(ノイマンは然らず) 予は本書舊版及『國民經濟原論』に於ては其說に従はざりしも、今は即ち其

の説を取る。予が新舊兩説の大意に就ては前章補論を舊著國民經濟原論(本全集後段に收む)と比較して之を知る可し。

勞働は力作(獨語 Kraftausserung 英語 exertion) 即ち力を發現すること、換言すれば、『エネルギー』態を他の『エネルギー』態に轉換するものなることは、マ氏もジェヴォンズも之を認め、フックスも亦之を認む、予の全然服従する所なり。

* * * * *

本章の参考書は前章に掲げたるものを見る可し。其他には

Julius Lehr, Produktion und Konsumtion in der Volkswirtschaft. Herausgegeben und vollendet von

Kuno Frankenstein. Leipzig 1895.

新刊のものとして

Diehl, Theoretische Nationalökonomie. II. Bd. Die Lehre von der Produktion. Jena 1924.

Castberg, Production.

古きものにては左の書を見る可し。

Torrens, An Essay on the Production of wealth: with an appendix in which the principles of political economy are applied to the actual circumstances of this country. London 1821.

第四章 所得と資本

凡そ經濟學の根本概念は皆貨幣價值を以て測らるてふ標準を以て限定す可きものなることは既に屢々述べたる所にして、此點に於てマ・シアルの所論は全然予が私見と合するものなること亦之を言へり。殊に現今の經濟生活に於て其最も根本たる富若くは財の概念は貨幣價值の評量なくしては、到底之を一定し能はず、從て生産並に消費の意義も此點を準據として相分つ可く、其他の説明は實際生活の現象を解釋するの力なきこと、亦前章に於て論究したる所なり。今富の一種たる資本と其成果たる所得を論ずるに就ても、此標準を離る可からず。然るに原則として貨幣評量を立論の基礎とするマ・シアル

が本章に於て説く所主義の一貫を缺くもの少からず。而して現時經濟學純理論中學者間に論争の最も喧しきもの亦た同じく資本の本質如何の問題に在り。然る所以は、マ・シアルと同じく獨り資本及所得に就いては貨幣評量なる標準を認めざるに基くもの多し。予を以てこれを見るに資本の本質に關する疑義の多くは吾人の一度採りたる根本主義を一貫すれば之を解くこと左迄困難ならず。富生産消費勞働經濟行爲經濟法則等を觀るに同一の眼孔を以て資本並に所得の本質若くは存在の理由を説明せざればこそ紛糾を生ずるなれ。元來資本及所得の性質が他の根本概念と異なりてこれを究むること難きが爲めにあらず。然れば何故に獨り資本に關して原則の一貫を破り種々の難問を生ずるに至りたるか。此問に對する答は容易なり。曰く資本及所得は富生産消費の如き抽象的解釋を容れざる現在生活の具象的概念なり、一は第一次的根概念にして、一は第二次的根概念なるが故なり。富の概念は學理的論究の上に於てこそ重要なれ實際上の問題には殆んそ全くこれを疏外するも敢て差支を見ず。否、富の實際生活に於ける發現は、多くは資本の態を取る資本ならざる富の如きは經濟問題の範圍に入り來ること

と稀なり。更らに極端に之を云へば、經濟問題として學者の講究するは、概ね生産論と流通論とにして、消費論は殆んど問題とならず、故に一部の學者は消費論を以て、全然經濟學以外に立つものなりとせり。而して生産の立場より見たる富は常に資本の形態に於てのみ現はる。されば單に富と云ふときは多くは消費の對象たる富（之を消費的富 Consumption wealth 又は消費財 Consumption goods と名く）の意に解せられ、生産用の富の意を寓せず。而して消費は經濟問題として考究せらるゝ、こゝ稀なれば、消費的富の意に解せらるゝ富は、具象現實の概念としては經濟學中に重きを爲さず、單に抽象的意義に於てのみ根本概念と認めらる。されば富に關する經濟學説は専ら力を其抽象的方面にのみ注ぐが爲め、實際生活に於ける用語法若くは内容の爲めに煩はさるゝ、こゝなく、能く一貫の説明を保つを得。之に反して資本の概念は、單に學理的抽象的の術語として用ゐらるゝのみならず、實際生活に於て慣用せらるゝ、通俗語なり。従つて實際生活が此語に與ふる種々の異なる内容は、學術語としての資本に附着することを免れず。殊に其關連概念たる所得の語に至つて然りとす。是れ此兩語に關しては、學者の説明が一貫の主義を維持

する能はざる所以なり。以下マ氏の論述を解釋する、先づ此點に注意するを要す。

今先づ茲に擧げざる可からざるは、資本に關して異説甚だ多し、雖も、之を以て生産の用に供せらるゝ、富なりとするに至つては、諸説皆其揆を一にするこゝ是れなり。

富
資本たるもの——生産の用に供せらる
資本たらざるもの——生産以外の用に供せらる（多くは消費の用に供せらる）

或は簡單明瞭の區別を施すときは、左の如く爲すを得可し。

富（廣義に於ける）——資本
富（狹義に於ける）

而して資本の本質如何に關する論争は、生産の用に供せらるゝもの、凡てが資本なりや否や、或は其一部のみが資本なりや若し然らば生産の用に供せらるゝ富の中如何なる部分を認めて、資本と爲すやの問題に集中するなり。此問題は其稱して生産と云ふものに關する見解の異なるに從て異なる。予は既に前章に於て生産とは貨幣の秤量に見積られ得る價值の發生又は増加なりと定義せり。此定義を一貫する以上は吾人は躊躇なく生

産（營利生産の意に於て）の用に供せらるゝものは皆資本なり、資本とは生産の用に供せらるゝ富の全部なりと答ふるを得可し。従て又資本とは貨幣價値の發生若くは増進を得んが爲めに充用せらるゝ富なりと斷言して毫も差支を見ず。而して所得とは此資本の充用に依りて生ずる貨幣價値を有する成果なりと云ふ可し。此定義はまた之を反對に言表はして資本とは所得を生ずる目的を以て充用せらるゝ富なりと稱するも差支なし。實際に於ては此後の定義こそ資本の何なるやを知るに最も簡便なる標準を與ふるものなり。即ち

富 { 所得を生ずる富 ———— 資本（營利の手段）
所得を生ぜざる富 ———— 非資本（營利の手段たらざるもの）

是れ實に資本に關する諸說中卓然として群説を拔く、バダム・スミスの有名なる定義の真意なり。曰へ、

But when he possesses stock sufficient to maintain him for months or years, he naturally endeavours to derive a revenue from the greater part of it; reserving only so much for his immediate consump-

tion as may maintain him till this revenue begins to come in. His whole stock, therefore, is distinguished into two parts. That part, which, he expects, is to afford him this revenue, is called his capital. The other is that which supplies his immediate consumption; and which consists either, first, in that portion of his whole stock which was originally reserved for this purpose; or, secondly in his revenue, from whatever source derived, as it gradually comes in; or, thirdly, in such things as had been purchased by either of these in former years, and which are not yet entirely consumed; such as a stock of clothes, household furniture, and the like. — Adam Smith, *Wealth of Nations*, Edition Cannan, 1904, Vol. I, p. 261.

僅か數週若くは數日を支ふるだけの資産 (Stock) を有するものは之を自家消費の用に供して餘す所無かる可し。之れに反し數月若くは數年を支ふるに足る資産 Stock 獨の財産 人々全く同義にして、後世英國學者を有するときは彼は當然其大部分より收入を得んを富 Wealth と云ふものに該當す。而して其餘は彼が此收入を得るまで彼が生活を支ふるに足るものだけを留むるに過ぎざる可し。かくて彼の資産は二部に大別するを得可し。即ち一は彼が之れより收入を得んと期待する部分にして之を資本と云ふ。一は彼の直接の消費の

用に供せらるゝもの之れなり。此は又三小分するを得。(一)初より消費費用に向て留保せられたるもの。(二)時々入り来る収入。(三)以上二種を以て買入れ未だ消費し盡されざるもの、例へば衣服家具其他の如き是なり。

此定義は今日に至り既に久しき年所を経たるも猶其價值を失はざる卓説云はざる可からず。殊に今日の實際生活に於いては舊文明國は多く富又は資本物件を評價するに其收入價值(Rental value)を以てして資本價值(Capital value)を以てせざる可き、セリグマンの其『經濟原論』に於て論ずる如くなるが故に、資本の觀念は先づ所得の觀念を定めて而して後に知る可きものなり。ブルードン曰く、資本を捉へんにはアルキメデスが龍を捕へたる如くせざる可からず、即ち其尾を捕ふ可し、資本の尾は利潤所得即ち是なりと。『改造』大正十三年七月號拙稿『自由獲得社會より資本的營利社會へ』を見よ。

今本章に於けるマシーアルの説明を見るに、又出發點を先づ所得の觀念に求め、之より歸納して資本の觀念に至る。其の論述の方法は予の全然推服する所なり。然れども氏は所得の觀念を定むるに以上述べたる貨幣價值の標準のみを以てせず。是れ予の與し難き所なり。

難き所なり。

氏曰く幼稚なる經濟社會は獨逸學者の所謂自然又に於ては自ら耕し自ら食ひ、自ら織り自ら着るのみ従て其の收入の大部分は貨幣の態を採らず。故に此の時代に於て所得云ふときは資本と資本ならざるものととの區別なし。然るに貨幣經濟氏は此所に於ては用ひて Money economy を云ふの發達するに従ひ、所得を以て貨幣の態に於ける收入のみに限るの傾向生じ唯だ之に加ふるに物品拂(payments in kind)例へば家屋の自由使用石炭瓦斯水の自由供給等貨幣の支拂に代へて使用人に供給するものを含ましむるのみに至れり。此故に學者或は自然經濟時代と貨幣經濟時代との間には根本的性質上の差異あるが如く説くものありと雖も此は當らず、一定の根本概念は常に兩者に共通なり、異なるは唯其發現の態のみと。而して此より氏は資本を論じて

In harmony with this meaning of Income, the language of the market-place commonly regards a man's Capital as that part of his wealth which he devotes to acquiring an income in the form of money; or, more generally, to acquisition (Erwerbung) by means of trade. It may be convenient some-

times to speak of this as his *trade capital* which may be defined to consist of those external goods which a person uses in his trade, either holding them to be sold for money or applying them to produce things that are to be sold for money.

右の所得の意義に應じて實際社會に於ては或人の資本と云ふときは貨幣の態に於ける所得を得るに供する富を意味す。更に汎く之を云へば營利の用に供せらるゝ富を一般に資本と稱す。之を名けて營業資本（獨逸學者の營利資本）*Erwerbskapital* と云ふも可なり。乃ち營業資本とは貨幣に換へて賣り若くは貨幣に換へて賣る可きものを生産する目的を以て營業に用ゐる外界財より成るを定義するを得可し。

と云へり。而して其内容は、工場其他營業用の設備、即ち機械原料勞働者に給する衣食住の料及營業上の得意株等にして、更らに之に加ふるに所得を生ず可き各種の權利を以てす、可く負債は之を控除す可しと云ひ更に曰く

This definition of Capital from the individual or business point of view is firmly established in ordinary usage, and it will be assumed through the present treatise whenever we are discussing pro-

blems relating to business in general, and in particular to the supply of any particular group of commodities for sale in open market. Income and Capital will be discussed from the point of view of private business in the first half of the chapter; and afterwards the social point of view will be considered.

資本に關する右の定義は、個人的營業的の立場より見たるものにして、實際生活に於ける確定不動の用語法に基けるものなり、故に此書に於て營業一般殊に公けの市場に於て販賣せらるゝ物品の供給を論ずる時は、全く此用法に従ひ、資本なる語を用ゆ可し。本章前中に於て資本及所得を論ずるは私的營業の眼點よりす可く、而して後に至りて社會的眼點を考察す可し

と。即ち氏は資本を以て個人的資本、社會的資本の二つに分つ可きものとし、以上に論じたる所は、一に全く個人的資本、個人的所得に就て言ふに過ぎざるものにして、別に社會的資本の論を以て、之を増減せざる可からずと爲すものなり。此論全く通説に従ふ。殊に近來資本に關する最も諄博深邃の研究を以て著はるゝ、奧國派の泰斗ボエム、バヴェルク

の所論に従ふものなり。予は此の説に同ずる能はず。マ氏の個人的立場より見たる資本に關する説明は、予に於て多く間然す可き所を見ざるも、別に社會的資本の概念を構成して、之に加へんとするは論詳密を増すに似て實は其の透徹を打破するものと信ず。此點に於ては方今大多數の學者の通説とする所に對して、予は飽迄も私説を守らんを欲するものなり。

今先づ個人的立場より見たる資本より推論して、純所得、利子、利潤、企業利潤、賃子、準賃子、資本の區別等に關し、マ氏の論ずる所を聞かん。

一 純所得。純所得とは營業の總所得より生産に要したる總ての支出を控除したるものを云ふ。而して此は多く貨幣の態を採るは論を須たざるも、猶時に貨幣の態を取らざるものをも此種に算入するを要するとあり。即ち他人をして之を爲さしめば貨幣を支拂ふを要することを自ら爲したる場合には、此勞務は自ら之に服したる人に取りては、一の所得なり。自ら園圃に耕し、家屋を修理し、衣服を裁縫するもの、若し他人をして代つて之に當らしむるにせば相當の賃錢を支拂はざる可からず。然

るに自ら之を營むときは、金錢を支拂ふを要せず。而も其人の受くる利益は同一なり。自ら營みたるが爲めより、貧く成るものにあらず。然るに此勞務を所得に算入せざるときは、他人をして其事に當らしめ、自らは其時間を以て他に貨幣を得るの業を營みたる人の方所得多く、自らの時間と勞務とを費して之を營みたるもの、方所得少きことなる可し（自己所有の家屋に住ふ人、自己所有の家屋は之れを他人に賃貸し、自己は別に家賃を支拂ひて他人の家を賃借して、之れに住ふ人との場合亦之れに同じ）。之れ正當に非ず。仍てマ氏は此種の所得を言表はすに『純便益』なる語を以てせんて左の如く云へり。

The need for it (the word net advantages) arises from the fact that every occupation involves other disadvantages besides the fatigue of the work required in it, and every occupation offers other advantages besides the receipt of money wages. The true reward which an occupation offers to labour has to be calculated by deducting the money value of all its disadvantages from that of all its advantages; and we may describe this true reward as the net advantages of the occupation.

此の如き語（純便益なる語を云ふ）の必要な所以は各業は之に要する疲勞以外の不便益を要することあり、貨幣貸銀以外の便益を供することあるに依る。故に一業が與ふる眞正の報酬は貨幣の價に見積らるゝ、一切の便益より、同上一切の不便益を差引きたるものにして之れを其業の純便益と名く

二 利子。一定の期間資本を他人に貸付けたるに對し支拂を受くる報酬は、其貸付資本に對する一定の比例率を以て表はさるゝ之を利子と云ふ。又資本より生ずる所得全體の貨幣價值をも名けて利子と稱することあり。兩者共に資本額に對する一定の比例率を以て言表はさる。百磅を貸付けて年四歩の利を收むるときは、其利子額は年四磅なり。一萬磅の資本を投じて營業し年四百磅の所得あるときは、其利率は年四歩と稱す。但し此場合其投下資本の價值に變動なきものと推定するは言を俟たず。

三 利潤。苟しくも營利の業に従ふものは其全體の利益が其當時普通の利子率を超過するの望あるにあらざれば之を營むことなかる可し。此全體の利益を名付けて

利潤と云ふ。資本に對する利潤の割合を利潤率と稱す。

四 企業利潤。利潤より普通利率に見積りたる資本利子を控除したるものを企業利潤とす。

五 賃子及準賃子。家屋ビノ裁縫機械の如き物を他人に貸與へて得る報酬を普通に賃子（賃貸料）*(rent)*と稱す。學問上に於ても、個人の立場より云へば、斯く言ひて差支なし。然れども社會全體より見れば賃子なる語は天然の自由なる賜、即ち土地にのみ限りて使用するを勝れりとす。而して土地以外のものに對する賃子は寧ろ之を準賃子と稱す可し、之を單に利子と稱するは穩當ならず。百磅の價ある器械が一年四磅の利益を生ずるときは、其割合は年四歩なれども、器械の價が八十磅に下落するときは、其割合は年五歩なる可し。即ち此四磅の利益は器械其物より生ずるものなるに、利率を以て言表はすときは常に器械其物に非ずして、器械の貨幣價值を標準とするものなり。されば單に報酬又は利益を其貨幣額にて稱して何磅と云ふときは之を認めて利子と爲す可からず、賃子の一種なる準賃子と爲す可きものなり。

六 資本の種類。普通資本の種類を分つて、(一)消費資本 (二)補助又は要具資本と爲す。之は實際上便宜ある區別なれども、其意義漠然たるを免れず。今此二語に定義を下せば、凡そ左の如くなるべし。

一、消費資本。直接に欲望を充たす可き態にある財の總體を云ふ。食料衣料家屋等の如し。

二、補助又は要具資本。生産上勞働を補助する資本を云ふ。器具器械工場鐵道船渠船舶並に各種の原料等を云ふ。

然れども勞働者は勞働に従事するに衣服を要す。此點から云へば、衣服も亦一の補助資本なり。乍去普通此等は消費の用に充つるものと看做さる。

又資本に固定資本流通資本の別あり。其意義は嘗てミルの下したる定義を以て定むるを得可し。即ち固定資本とは、永久的の態を有し、之に對する報酬はまた長期に涉りて連續して入り來るものを云ひ、流通資本とは一回の使用を以て其用を爲し了るものを云ふ。

以上マ氏の説く所大體に於て異議を容れず。但し準賃子なる語は必ずしも必要ならず、英語に於てこそ賃子 (レント) なる語は、多く土地の賃子即ち地代の意に用らるれ、大陸諸國の語に於ては地代は之を佛 *rente foncière* 獨 *Grundrente* 伊 *rendita fondiaria* 即ち土地賃子と稱すれば、*「レント」* なる語は土地並に動産に對する賃子の總稱として用ゐて一向差支を見ず、而して斯くする方却て精確なり。

固定流通兩資本の定義は寧ろ左の如く改む可きか。一生産經過中に其用を盡くし終る目的を以て充用せらるゝ資本を流通資本と云ひ、然らざるものを固定資本と云ふ。是れミルの定義と大差なきが如し、雖も、永久的と稱する時期の長短漠然たり、必ずしも永久的ならざるも亦た固定資本たるを妨けず、故に以上の如く改むべし。

以上を以て個人的立場より見たる資本の説明を終り、マ氏は次に進んで、社會的立場より見たる資本を論ず。其論稍詳細に涉るゝ雖も、其眞意を要すれば、一言を以て盡くすを得可し。曰く、貨幣價值のみを標準とせず、汎く一般に人に利益を與ふるの點より見て所得及資本を論ぜんことを是れなり。氏自ら曰く

That is, let us revert nearly to the point of view of a primitive people, who are chiefly concerned with the production of desirable things, and with their direct uses; and who are little concerned with exchange and marketing.

を要するに望まじき諸物の生産を、其直接の使用のみに従事し、交換、賣買を營まざる幼稚なる人民（即ち自然經濟時代の人民）の立場に立返つて此問題を論ぜんとするなり。即ち貨幣經濟の立場を離れ、所得も資本も、其貨幣價值の方面よりせざる、自然經濟的立場より見んとするなり。

今此意義に於ける所得は之を所得と稱するは稍混雜を招くの嫌あるにより、之を名けて用益 *usage* と云ふを勝れり。用益とは

Include the whole income of benefits of every sort which a person derives from the ownership of property however he applies it.

其使用法の如何に拘らず總て財産の所有より或人が受くる各種便益の總所得を稱す。但し所得なる語も實際上必ずしも前述べたる狹き意義（即ち貨幣の態に於け

る收入）のみに限られず。例へば所得税賦課に際し自用家屋の賃貸價值を所得に計上すること屢あるが如きはなり。前段を見よ

ジェヴォンズが汎く消費者の手にあるものを資本と稱す可しと云ひて以來學者間に其説を祖述して論争するものあり。雖も此くの如きは重要な問題と看做す可からず。汎き意味即ち社會的立場より見たる資本は茲に云へる用益を生ずものと云ふとせば事足れり。而して此汎き意味にて資本なる語を用ゆるは所謂生産三要素の一としての資本を論ずる時に多し。此意味にては凡て收益を生ずるもの、内土地のみは之を除き、其他のもののみを資本と稱するを妥當なりとす。即ち

All other things than land, which yield income, that is generally reckoned as such, in common discourse, together with similar things in public ownership, such as government factories.

土地以外のものにして總て普通に所得と認めらるゝものを生ずる物並に公有物にして同性質のもの（例へば政府工場の如き）を稱して資本と云ふ

を。而して斯く解するは資本對勞働の問題を論ずるときに資本なる語を用ゐる意義に

最も善く相應す。更らに一國民の富を秤量するには國民的富を以て標準とするよりも寧ろ國民的所得を標準とするを勝れり。此國民所得は猶後に説明す可き理由により、之を國民的分配元資と稱するを得可し。蓋し國民的富の中には直接消費の用に供せらるゝもの多くを含むが故に直ちに之を標準として其國民の富を測るは誤解を招き易く、之れに反して所得を標準とするときは各國特殊の事情は凡て相平均し其真相を窺ふに便あり。マニトバミケンとの兩地に於ける土地「エーカー」の價の差は小麥「ブッシュェル」の價の差よりも大なり。是れ消費財は生産財よりも運搬の便多く從て世界各地に於ける其價の差違ひければなり。予は社會的資本なる語も其内容も採り難しとする理由は既に述べたり。マ氏の所謂用益なる語亦多く其の必要を見ず。蓋し所得税賦課に際して貨幣所得以外のものを算入するは孰れも其が何等かの方法によりて貨幣額に見積らるゝを得ればなり。予の既に説ける如く狹き意義に解する所得と雖も決して單に現に貨幣額として收得する所得のみを言ふにあらず貨幣價值の秤量を以て見積られ得るもの全體を指して云ふなり。

されば自用家屋の如きは其賃借する場合に於ける貨幣價值を推定し得るものなるが故に當然此意味に於ける所得中に含まるゝものなり。別段用益なる新語を設けて之を特稱するを要せず。されば如何なる點より考ふるも社會的資本社會的所得等の概念は其必要を見ず。却て一語に附するに二の異なる意義を以てするに依り混同と誤解とを惹起すの危険あり。予は斷じて其説を採らず。猶マ氏は本章末項に生産性豫見性の二心理的要素が資本を發生し其存在を維持するものなるを説く。雖も別に論究の要を見ず。

第四章 補論

近來米國の學者クラークは資本 (Capital) と資本財 (Capital goods) との別を設け其異同を論ずること詳なり。曰く資本と資本財とは區別す可きものなり。資本は貯水の如く資本財は流水の如し。一は一定不變にして、一は變化定まる所なし。一定の比例率にて

現はさるゝ、利子は資本に對するものにして資本財に關係するものにあらず。此事予嘗て『不變の資本、可變の資本』と題して論じたるとあり。經濟學研究一七頁以下蓋しクラークの斯く論ずるは、マルクスの不變資本 (konstantes Kapital) 可變資本 (variables Kapital) の別に關する所論、其根柢を一にす。繰返して再生産せらるゝものは不變資本なり。其價值は常に變動せず。然るに實際生産の用に充つるものは有形物にして、皆何時かは其形態を變ず、原料は製品となり、枳は米となり、器械は銷磨せらる。其新らしき生産物に移りて變らざるものは價值のみ、具象の形態は必ず變ず。是れを可變資本とす。クラークの資本財と稱するものは是れなり。人あり百萬圓を投じて紡績業に従事す、此百萬圓と稱するは、百萬圓の貨幣價值なり、之を具體するものは一定せず、或は五十萬圓を建物に投資し、三十萬圓を器械に投資し、十萬圓を原料に、十萬圓を賃銀支拂に充つるものあらん。而も全體の資本額は百萬圓なり。即ち此の百萬圓と云ふは資本にして、建物器械原料賃銀資金は、資本財なり。此の説に對しては資本論を以て著名なるボエムバヴェルク熱心に反對し、Quarterly Journal of Economics 誌上數回に涉りてク氏と學界稀有の大論戰を闘はせたり。而

も予は寧ろクラークに與せん。而して斯く二種の別を設くる必要は、分配論を説くに方りて殊に著しむ信ずるものなり。利子には一定の比率あり、然るに賃銀にも、地代にも將亦企業利潤にも是あるなし。利子は何割何歩を以て言表はすも、地代賃銀利潤は一定の貨幣額を以て示さる。何故に此別あるや。他なし、地代賃銀利潤は實在確實の報酬なり。利子は然らず。一萬圓の貨幣を他人に貸して年五歩の利子即ち五百圓を收むる場合に借りたる人が其一萬圓を以て家屋を買ひたるに、間もなく其價八千圓に下落せり。彼は猶五百圓の利子を支拂はざる可からず、是れ年四歩に當らず、年五歩に當るこま氏の設例せる所の如し。即ち資本財は八千圓に下落したるなり。資本は然らず、其價值は依然として一萬圓なり。是れ其貸したるものは家屋なる資本財にあらず、一萬圓と稱する貨幣價值を有する不變資本なるが故のみ。從て此資本に對する利子率は、資本財たる家屋の價值下落するも毫も輕減す可き理由無し。之れに反し一萬圓の價值を有する家屋を人に貸し其賃子 (賃貨料) を年二割と定めたりとせよ、其額は二千圓なる可し、然るに此家屋の價八千圓に下落したりとせよ、賃子は八千圓の二割即ち千六百圓

に減ぜざる可からず。是れ其貸したるものは可變なる資本財にして、不變なる資本に非ざるが故なり。資本の有する價值は、一定不動なる貯水池中の水の如く、此價值を具體する資本財の價值は變遷極まらざるこゝ河に流るゝ水の如し。ヒルデブランド嘗て曰く、資本は其大さ（即ち價值）より云へば不變なり、其形より云へば可變なり。是れ夙に其意を道破したるものに非ずや。而して、マ氏も亦本章脚註中にクラークの説を掲げ、此論は幾多の困難を有す、雖も多少の變更と斟酌を加ふるべきは甚だ有益なる説なる可しと云へり。予はマ氏に賛同せざる能はず。

資本を別て固定流通の二とするは、斯學の定論にして、また實際生活に於て多く用ゐらるゝ所なり。獨逸の學者は猶之に加ふるに、*flüssiges Kapital* の *festes Kapital* の別を設く、其靜固定流通に基だ似たるが故に、之を邦語に譯出すること稍々困難なり、雖も姑く前者を融通資本後者を不融通資本と稱し置く可し。直ちに其形態を換ふるを得る資本殊に貨幣に具體せられたる資本を融通資本と云ひ然らずして特定の形態に在りて容易に其態を換ふる能はざる資本を不融通資本と云ふ。此區別は其用語固定流通の別に甚相似

て混同の虞あり、之を改めて貨幣資本 *Geldkapital* の 商品資本 *Warenkapital* の 爲す、*リッマ* *クス* の如くする方通かに勝れり。

* * * * *

本章の参考書其類甚多し。其最も著名なるものは前文屢々引用せるボエムバヴェルクの著 *Bohm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins*. Innsbruck. 4. Aufl. 1921. 是れなり。其反對論としては Clark, *Distribution of wealth*. New York. 1920. 及び同氏の *Essentials of Economic Theory*. New York. 1907. を見る可く、他 Fetter, *Principles of Economics*. New York. 1905. pp. 46-170. あり。又クラークに反對の立場を取るを専らとせるタウシンズ著 *Tausig, Wages and Capital*. New York. 1906. を参考す可し。其他經濟原論の書何れも資本を論ぜざるなし特に資本理論を取扱ひたるものにて必讀のものは左の如し。

Rae, *Sociological theory of Capital: being a complete Reprint of "The new" principles of political Economy*. 1834. Edited by Mixer. 1905.

Karl Menger, *Zur Theorie des Kapitals* in Conrad's "Jahrbücher für Nationalökonomie u. Statis-

tit." Bd. 17. 1888.

Irving Fisher, The nature of Capital and Income. 1906.

Spethoff, Die Lehre vom Kapital in "Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19

Jhdt" Th. I. No. 4.

資本に關する最大著述は云々迄もなくマルクスの資本論なり。但し其書難解初學者には薦め難し。其原名左の如し。

Marx, Das Kapital. Hamburg. 1867-94.

其の註解も見ざる可きものにして薦む可きや。

Hilferding, Das Finanzkapital. 2. Aufl. 1920.

Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals. 1913.

なり、其論を必ず對照を要するは、ハルシーン及ローゼンハルトスの書なり。原題左の如し。

Proudhon, Theorie de la propriété. Edition posthume. Paris 1896.

Robertus, Das Kapital. Neue wohlfeile Ausg. 2. Aufl. 1913.